

## 藤原良経詠歌年次考

— 秋篠月清集と関連して —

片 山 亭

一、「句題百首」をめぐって

良経の千載集入集歌七首中「虫声非一」について旧稿(注1)で句題百首中の同一歌題である点から推して、文治三年十一月廿一日以降の作の可能性があることを述べたが、推論に失考があるので、最初に補訂をしておきたい。この句題百首は拾玉集によると「文治三年十一月廿一日詠之。自<sub>三</sub>九条殿<sub>一</sub>給題、与<sub>三</sub>寂蓮禪門<sub>一</sub>相共風吟耶。頗不<sub>三</sub>宜<sub>一</sub>詠歟。」とあって、兼実から給題された結題百首である。この「給題」は従来「出題」と考えられてき、(注2)稿者もその視点に立って述べたものであるが、実はこの結題は慈円、寂蓮の文治三年詠が最初ではなく、既に兼実の右大臣家後百首として詠まれた歌題であった。

もっとも右大臣家後百首と呼ばれる百首は二種ある。すなわち、経家卿集(桂宮本叢書)では治承二年右大臣家百首の歌二十七首がみ

える。(このほかに右大臣家百首と題詞のある千鳥一首・不遇恋二首・夜恋一首・片思一首・法花経曾成伝一首があるが、これは歌題に合わない。)そして「右大臣家百首」として盧橘二首・七夕三首・経年恋二首・松四首があり、これによると後百首は右大臣家百首と同じく同題五首の百首であったと思われる。前述の右大臣家百首の歌題に合わない歌はあるいは後百首であったかもしれない。さらに、「百首中」として梅有遅速・庚申七夕・幽香薰枕・夜半駒迎・虫声非一・古渡千鳥・禁中神楽・絶互悔恋・野亭聞鐘・海路日暮・山家送年・田家老翁各一首があり、これが文治三年句題百首の歌題と一致することは旧稿で述べたとおりである。

ところで、類従本隆信集には右大臣家百首の十五首が見出され、(このほか「後法性寺殿右大臣家御とき後百首に、のちのあしたのころを」とある歌も、右大臣家百首・後朝恋の誤りとみてよい)

あろう。)さらに「後法性寺入道殿右大臣ときこえたまひしとき後の

百首に」など、(多少の語の出入りはあるが)と題詞のある

はれたるそらにかへるかり

(晴天掃雁)

もりの間のすみれ

(杜間重菜)

おきのをとねふりをおとろかす

(荻声驚眼)

ころもうつこ系はるかなり

(掃衣声幽)

つこもりのよの仏名

(除夜仏名)

なれてあはさるこひ

(剛不逢恋)

かへりてふみなきこひ

(帰無書恋)

たゞし右のうち「はれたるそらにかへるかり・もりの間のすみれは  
右大臣家百首となっている。これらの歌題はかな書きになつてはい  
るが、下に示した句題百首の結題と一致する。また「のちの百首に  
」の題詞のみがあつて歌題のない

君とわかかはず心はあふさかの関にやふたり立とまるらむ

という歌は句題中の「等思兩人」の題の歌であつたと思われる。こ  
うして隆信集から八首の右大臣家後百首の歌を認めることができ  
る。それではこの両度の後百首はどういう関係にあるかというに、

経家卿集の

右大臣家後百首、経年恋

いかなれはひとのつらさもゆくとしもわか身ひとつにつもるなる

らん

は月詠和歌集・巻第九に

右大臣家後番歌合に経年恋といふことをよめる

藤原経家朝臣

いかなれは人のつらさも身のうさも我身ひとつに積るなるらん

と第三句を異にするが、入集している。ここで注意すべきは月詠和

歌集の「右大臣家後番歌合」という題詞で、同集にはこの歌のほか

巻第三に

右大臣家後番歌合に花をよめる 俊恵法師

さくらまぢゝるをゝしむに春かれて花に心をつくしはてつる

一首がみえ、この歌は林葉集の右大臣家百首中花五首と題詞のある  
歌とは別であつて、後番歌合に花という題が改めて出題されたこと  
になる。以上のようなわけで、経家卿集の右大臣家後百首が後番歌  
合であつたと考える可能性は極めて大きいのである。とすれば経家  
卿集の右大臣家後百首が詠まれたのは治承二年九月二十日、右大臣  
家百首披講が終了した後まもなくのことと思われる。句題百首は経  
家卿集の題詞からみて、これ以後のことと考えられるが、ここでも  
経家卿集の「百首中に古渡千鳥」の歌が、月詠和歌集、巻第十一の  
「月前千鳥といふこゝろをよめる」と題詞のある歌の一首として入  
集している。従つて隆信集にいう右大臣家後百首も月詠和歌集成立

の寿永元年十一月以前の催しであったことが明らかである。

ところで、続群書類従寂蓮法師百首には「詠百首和歌大集入道出題」の端作りがあり、この句題は六条藤家重家の出題であったと考えられる。安元々年から治承三年にかけて兼実家の和歌行事は極めて多く、六条家歌人達は所謂常祇候之輩であったから、重家が出題した可能性は充分にあるわけである。重家は治承四年十二月二十一日に薨じ、治承四年は頼朝挙兵、福原遷都にはじまる源平争乱の激化した年で、兼実家の雅事も殆ど催されていないから、句題百首が右大臣家後百首として詠まれたのは、治承三年ごろと推定して大きな誤りはないであろう。久曾神昇氏によると、書院部桂宮本、少輔入道定長百首の奥に「少輔入道定長百首、とのゝむすひたいとぞ、もろてむをかきいたすへし」という俊成の識語があるよしで、(注3)それが従来兼実出題の根拠とされてきたわけであるが、上述のごとく、既に右大臣家後百首として催されていたのであるから「とのゝむすひたい」と俊成が記したとしても矛盾はないのである。かくて句題百首は重家出題によって右大臣家後百首が治承三年ごろ催され、文治三年十一月、兼実給題によって再び慈円、寂蓮が詠じたということになるのである。

こうしてみると、良経が「虫声非一」という結題を詠んだのは、慈円寂蓮の句題百首に触発されてというよりも、右大臣家後百首の

結題で習作を試みたとみる方がより自然である。良経は初期の習作は後年殆ど問題にせず、(建久九年後京極御自歌合では千載集入集歌さえ一首も入れていない。) かりに文治三年十一月以後の詠とするならば、同句題の歌が月清集にもう少し入れられてもよい筈であるのに、千載集入集の「虫声非一」一首のみが月清集に入れられているのは、それがかなり早い時期の習作のせいではなかったかと思われる。とすれば、良経詠歌の始まる元暦元年以降、文治三年九月(千載集奏覧)以前で、たとえば「称他人恋といへることゝろをよみ侍りける」という雑題の歌が千載集八二四・八二五に良通・良経と並んで入集しているごとく、あるいは聯句を愛好した兄弟が、右大臣家後百首の結題に興味をもち、習作を試みた可能性もあるわけである。

注1 「藤原良経―その初学期をめぐって―」(中世文芸叢書別巻)

3・昭48・1)

注2 久曾神昇氏著「頸昭と寂蓮」(昭15刊)また、最近では半

田公平氏も兼実出題とされている。(「寂蓮の出家時代における

作歌活動」語文第37輯)

注3 前掲「頸昭と寂蓮」三四四頁。

## 二、盛久期

文治五年（一一八九）十二月、良経主催の雪十首歌会が催された。良経主催和歌会の初めである。当時歌壇は既に新風和歌胎動の動きを見せており、文治初年、西行勸進百首が各歌人（定家・慈円・寂蓮・家隆・隆信・公衡・長方・運位・運阿・運上・寂延・祐盛・度会春章ら（注1））によって詠じられ、文治三年殷富門院大輔勸進百首や前述の句題百首、また文治四年慈円早暉露胆百首、これに対する定家の奉和無動寺法印早暉露胆百首、重奉和早暉百首（文治五年）など活潑な詠歌活動が展開されていた時期である。

良経の歌は十題中、社頭雪・雪中遊望・山家雪（ただし二首あり、いずれとも決めがたい）が月清集にみえる。

1326 みかさやまむかしの月を、もひいて、ふりさけ見ればみねのしらゆき（社頭雪）（注2）

1327 ゆきしろきよものやまへをけさ見ればはるのみよしの秋のさらしな（雪中遊望）

前歌はいうまでもなく、古今集巻九の阿部仲麻呂の歌に拠ったものであるが、兩歌の詠み口はいかにも幼く、習作の域を出ない。雪十首歌中に定家の

まつ人のふものみちはたえぬらんのきはのすきに雪をもるなり

（山家雪、拾遺草）

などの秀歌のあることを思えば、格段の差であって、新風の気配は殆ど感じられない。歌人は良経・慈円・定家・寂蓮で、以後の良経

歌壇の中心メンバーであって、拾玉集によると密々の会であつたらしいが、良経歌壇形成のきっかけとなつたところに、この歌会の意義がある。これより先、良経は慈円・寂蓮の贈答歌に觸発されて十

首歌を試みている。すなわち同年九月、慈円は寂蓮に十首歌を送り寂蓮これに和したが、これを良経が聞き、「殿の大納言後十首歌

本歌并寂蓮和可御覽之由被示。仍持參之進了。其後又和道」云々（拾玉集（注3））とある十首歌である。拾玉集で良経を「殿の大納言」と呼んでいるのは、同五年八月十五夜の良通道懐の歌、同十二月雪十首歌およびこの十首歌に因つてであつて、この年十二月三十

日良経は左大将に任じられ、以後は左大将、左將軍、左幕下など、呼称しており、この十首歌はこれ以前の詠であつて、慈円・寂蓮贈答十首歌の詠まれた九月ごろの詠とみてよい。この十首歌（拾玉集には九首のみしか記載されていない）中の一首、

なかきよのふけゆく月をながめてもちかつくやみをしる人そなき（一五三四）

は月清集雜部に「述懐」の一首として入れられ、後京極殿御自歌合

・九一番左に「座主無動寺に侍ける頃十首むかし歌つかはしける返

事」の題詞で、また三十六番相撲立詩歌・三六番右に「寄無動寺

事」の題詞で、また三十六番相撲立詩歌・三六番右に「寄無動寺

座主」の題詞で入れられ、良経自信作の一首であった。(注4)

しかし、良経の本格的な詠歌活動が始まるのは建久元年(一一九〇)九月の花月百首(月清集・一一一〇〇)からである。この年春二月十六日、西行が逝去し歌壇に衝撃を与えたが、これをめぐり慈円・寂蓮・公衡・定家がそれ／＼哀悼歌を贈答しているが、良経は三月五日災命(藤原仲実男)が罪を免ぜられたことについて慈円と贈答しているもの、西行没に関して沈黙している。これ以前より良経が西行歌に接しその影響を受けていたことは女御入内御屏風一三五九の歌からも明らかである。良経が西行に関して贈答したのは建久二年二月十六日西行一回忌に定家に対してであって(月清集一五七二一七三)、このことは建久元年二月時点での良経の和歌に対する態度がまだ微温的であるのに対し、花月百首以後建久二年にかけて、急速にその熱意が高まっていったことを思わせる。

花月百首は九月十三夜、九条邸で披露され、(歌人は皆十首歌会メンバーに、初学期良通・良経詩歌会に顔を出していた有家と九条家女房後が加わっている。廿二日撰歌合の玉養同日記事によると「俊成入道、季経卿已下歌人五・六人、米・大將方、花月百首各撰三十首合之、俊成入道決雌雄云々」とあり、これによると季経も出詠したか)後、当座和歌会が催され、歌題は雨後十三夜、聞虫

声増恋一題で、月清集には聞虫声増恋(一四三〇)がみえる。同廿二日、花月百首撰歌合が行われ、後当座歌合(歌題・夜憶紅葉・暮秋曉恋)が催されたが、良経詠は家集にみえない。同廿四日、兼実邸で三首和歌会が催され、歌題は秋日易暮、終夜掃衣、毎月逢恋三題であった。家集には終夜掃衣(一二五七)一首がみえる。

この年十月十九日、後白河院の東大寺棟上御幸があり、兼実は十五日宇治に赴いた。定家扈從し、十八日早且慈円に十首歌を送り、慈円は出発の騒ぎの中でこれに唱和した。良経は定家からこのことを聞き、これに和する十首歌を慈円に贈った。月清集にはこの十首歌中三首(一一三〇六一一三〇八)が見出される。月清集では右の「十月許宇治にて」と題詞のある三首の次に

よもすからこほれるつゆをひかりにてにはこのはにやとる月影  
(一一三〇九)

が同じ題詞の歌として載せてあるが、この歌は後京極殿御自歌合・四七番右に「冬のうたあまたよみける中に」と詞書してあり、次の「冬の歌の中に」の題詞三首の中に入るべきものである。月清集定家本・教家本諸本とも同一であるから、良経が部類のとき誤ったものであろう。新統古今集は月清集によってこの歌に「神無月の頃宇治にまかりて」と詞書し、卷十七雑上に部類しているが、あやまりとすべきである。この十首歌について青木賢豪氏は「説明的な論理性

を排し、選ばれた語句の組合せによってある種の気分を表わそうとする象徴的な手法・あるいは古典的な世界を取り込むなど意欲的な作歌態度が窺える」（注5）とされ、さらにこれ以後の定家贈答歌に言及し、新風を模索していた定家の手法と共通するものがあり、これに対して慈円との贈答は肉親的精神生活面での交流を主としている点を指摘されたのは適切である。この十首歌は建久元年良経の新風への取りくみの意欲的態度を示すものとして注目すべきである。

さて右の十首歌の後まもなく、今度は良経が十首歌を定家に送り、定家これに和し、さらに慈円が聞いて十首歌を唱和して良経に送っている。月清集はこのうち一首（一三三〇）をとり、「山さにてゆきのあしたによめる」と題詞をつけているが、拾玉集の十首末に「いかにあやしくおほしめすらむおほはらよりあさか申候なり」とあって大原の里での詠である。

十二月十五・十六日両夜、良経は内裏直廬で定家を詣らって二夜百首（一〇一一—一〇二〇）を試み、慈円に題を送って勸進し、多忙な慈円は良経のたつての勸めで翌年正月廿二、廿三日に詠んでいる。もともとこうした連吟は慈円の好むところで、慈円は文治三年十一月、厭離百首を三時の間に詠み、文治四年十二月十一、十三日、楚歌第一百首（草率露胆百首）を詠み、定家はこれに唱和して文治五

年春、奉和無動寺法印草率露胆百首、さらに同年三月、重奉和百首を詠んだ。慈円はさらに建久元年四月八日、一日百首（二時一点の間）を速吟し、同五月十二日—廿八日、宇治山百首を詠み、定家は同六月、一字百首、翌日一句百首を詠んで慈円に勸進し、慈円はこれを受けて勸句百賦、賦百字百首を詠むなど、速吟は慈円、定家を中心に一種の流行の観を呈していた。（注6）良経の二夜百首の試みはかゝる連吟への参加を示すものであり、こうして建久元年、花月百首以後急速に和歌に傾斜を示した良経は、慈円、定家に伍して、歌風の上では特に近侍した定家の影響を受けつゝ、新風習作期を送るのである。

建久二年（一一九二）八月十三日、良経は初度作文管歌和歌会を催した。この時の歌題は松上鶴であったが、良経の歌は家集にみえない。あるいは詩のみを詠じたのであったかもしれない。同年十月三日、良経邸で五首御会が行われた。拾玉集によると「已上五首季経卿番云々俊成入道判云々」とあるもので、季経が結番し、俊成が判じた歌会であったようである。歌題は薄暮思秋・連夜時雨・行路冬風・山水初氷・網代眺望で、月清集には山水始氷（一三一四）・網代眺望（一三二七）二首がみえる。この年閏十二月四日、十題百首（二〇一一—三〇〇）が披露された。これに先だち定家は十二月廿七

日百首を良経に進め、その折良経と二首の贈答を行なっているが、良経の歌は不明である。十題百首は作者良経・慈円・定家・寂蓮であるが、明月記当日条に、

四日、成申、天晴、午時許参<sub>三</sub>無動寺法印、爲<sub>レ</sub>悦<sub>二</sub>申牛車<sub>一</sub>也。見参良久之後、件少輔入道同乘退出。路次参<sub>三</sub>抑小路殿并中宮、此間入道在車中、相次参<sub>三</sub>一条殿<sub>二</sub>（良経邸）、依<sub>レ</sub>昨日仰<sub>一</sub>也。入<sub>レ</sub>夜被<sub>レ</sub>読<sub>三</sub>上百首<sub>二</sub>（和歌・入道・予事畢有<sub>三</sub>当座狂歌等<sub>一</sub>、深更相共帰<sub>二</sub>家<sub>一</sub>）とあり、定家は当日慈円を訪問しているにもかゝらず、つまり慈円は当日よんどころない所用があったわけではないが、夜の百首歌披露の席に出ていず、また披露も良経・寂蓮・定家の三百首であるから、拾玉集にみえる十題百首は披露以後詠まれたものかもしれない。

この年も慈円・定家との贈答歌多く、三月六日、慈円は無動寺より良経に一首を送り、良経返歌（一〇三五・一〇三六）、また六月には良経がいろは歌四十七首（歌不明）を詠じ、慈円、定家に送り、兩人唱和。拾遺愚草によると使を待たせて詠ませた速吟である。そのころ、良経は定家に文字誦二十首を速吟させ（良経の歌不明）、またおなじころ五行等を詠んだ十五首歌（月清集一四九〇—一五〇四）（注5）を定家に詠ましめている。この年冬、慈円・良経贈答一首（拾玉集・家集不見歌28参照）また同じころ贈答一首（拾

玉集・家集不見歌29参照）があり、閏十二月廿八日、慈円・良経贈答十首歌（拾玉集・家集不見歌30—39参照）がある。

この年玄玉和歌集が撰集された。（注7）良経の入集歌は四二首である。ただし卷第二天地歌上の「秋の色は」の歌は玄玉和歌集では左大臣（藤原定定）となつてゐるが、前述の建久元年十月宇治での十首歌中の一首で良経の歌であり、また、卷第六草樹歌上の「吹く風の」の歌は左大将とあるが、文治六年女御入内御屏風歌の右大臣（藤原実房）の歌である。また草樹歌上の「百首の歌の中に春の歌とて」と題詞のある

をしなへて花の梢になるまゝに雲こそなれみよしの、山は十題百首の

はるはみなおなしさくらとなりはてゝくもこそなれみよしの、山（二四一）

と下句のみが一致し、別歌とも考えられるが、良経の百首歌はすべて月清集に収められているから、題詞が正しいとすれば玄玉和歌集の誤記といふことになる。しばらく同一歌として処理する。玄玉和歌集入集により詠歌年次がこれ以前と認められる歌は月清集一〇〇五・一一七六・一二六七・一二六九で、また月清集不見歌で拾玉集所収の建久元年冬の雪十首歌中六首が玄玉和歌集にみえる。また、卷第七草樹歌下に「題不知」一首がある。「紅葉ちる」とあつて初

句を異にするが、宇治十首の一首である（家集不見歌15参照）

建久三年（一一九二）正月、慈円は良経に十首歌を送り、良経これに唱和している。慈円の歌は初句「みせばやな」に始まり、第五句「はるのけしきを」に終る勸句形式の十首で、良経はこれを受け「わがおもふ」「春のけしきに」で返している、慈円らしい遊戯性の強い連吟勸句十首であって、良経はこの十首歌から第九首目の対応する各一首を撰んで「おなしころ又やまより」と詞書して月清集（一〇三七・三八）に入れている。（他の九首については家集不見歌40—48参照）また同年八月、慈円は観性法橋（九条家に親しく良経旧知）旧跡の西山往生院に赴き如法經を書き、兼実、良経に観性を偈お歌を送り、良経これに和している。（月清集一五七六・七七）

一方定家は同年四月十七日、良経邸で和歌一卷を賜り、これに唱和しているが、良経の歌は不明である。また拾遺愚草員外に「建久三年九月十三夜大将殿にまいりたりしかは、にはかに人々めしつかはして、今こんといひしばかりにといふ冊をかみにをきてよませられしに、これにはかきとゝむへきものにもあらねと筆をたにそめあへぬみたりかはしきも中々やうかはりてやと」と注記した三三首（三一三七—三一六九）<sup>（注8）</sup>がある。いったい建久二、三年、良経はいる

は歌や文字誨や勸句をしきりに試みているのであって、それは建久元年、定家の一字百首や一句百首の試みに端を発したもので、十題百首から韻歌百二十八首への線上におくとき、新風和歌形成の一つの試みとみることもできるが、後年、定家はこれらの作品の殆どを拾遺愚草員外に収め、「とりあへざりしいたつらこと」（文字誨筆記）と述べているように連吟的遊戯性の強いものであって、良経には叔父慈円ほどではないが、慈円に共通する即興的なものを落ぶ傾向があったのであって、この点ひたすら芸術的昇華を求めた定家とはやゝ異なる一流貴族としての余裕ある遊びがあったことは否定できない。この傾向はその後も続き、建久六年秋「おきのうは風」「はきのしたつゆ」など末句を示して定家に詠ませた十首歌や、同六年またはそれ以前の秋夜、僧の読経を聞いて「南無妙法蓮華經」を歌頭にすえた十三首や、建久七年秋の「女郎花・藤袴」などを歌頭においた廿首歌、また同年初、使をまたせて「あきはなほゆふまくれこそたならねおきのうはかせはきのしたつゆ」を歌頭においた三十一首などを定家に詠ませているのである。

この年春、公衡との贈答一首があったか。月清集に「はなのさかりにおほうちにおはしましけるころ公衡卿のもとより女房の中へ」の題詞をもつ贈答一首（一〇三九、四〇）があるが、公衡は建久四年二月十一日に持病の脚気で逝去しており、その前年すでに出仕で



きなくなつたころの贈答であらう。公衝は建久元年、賦百字和歌や勅一句詠百首和歌などを定家・慈円とともに詠じた新風形成期歌人の一人であつた人である。(注6)とすれば「おなしころ南殿の花のナレ(教)を折りて人のもとへつかはしける」(一〇四二)と詞書する一首もこの年の春の詠とみてよい。

建久四年(一一九三)、二月十三日定家の母加賀が逝去し、良経は中陰三月尽日定家に弔歌(月清集一五七四、七五)を贈っているが、これより先、前年暮に良経は大規模な百首歌合を企画し、各作者に給題した。六百番歌合(月清集三〇一—四〇〇)である。この成立事情については松野陽一氏の論考(注9)に詳細であるが、この歌合は良経が中心になって企画したもので、もとより定家の協力があつたにしても、定家は母の服喪で中断しており、詠進も他の作者より遅れて同四年秋のことであつた。「今年雖<sup>レ</sup>禪<sup>レ</sup>身、依<sup>レ</sup>別儀<sup>一</sup>猶召<sup>レ</sup>此歌<sup>一</sup>(拾遺愚草)」と注記しているように歌合結番披講を急ぐ良経は段中の定家を促して詠進せしめており、(定家の兄成家は同四年六月廿七日復任しているから、良経の督促はそれ以前か)この歌合にかけた良経の期待と熱意のほどが窺われる。事実この歌合は良経の作風展開の上でも、また歌壇史的な意味でも新古今新風の開花を告げるものとなつた。

同四年この歌合の後番歌合が行われたというのが今日の通説である。これについて私見を述べておきたい。森本元子氏は「後京極摂政の家の百首に」と題詞のある新千載密一の殷富門院大輔の歌について、題詞が六百番歌合の他の歌の題詞と近似しており、六百番歌合に女流は加えられず、女流のために良経が百首を催したことは秋篠月清集にみえるから、女房百首の内容は五首歌の四季、恋五部もしくは六百番歌合にない同歌題をよませたもので、建久四年秋をいくばくも離れぬ時機の成立と推定された。(注10)

右の女房百首披講次五首歌は月清集に当世の女房哥よみとにも百首ヲナレ(教)よませて披講せしついでににナレ(教)春のころを」(一〇四七)、「五首のナレ(教)の夏のナレ(教)の心を」(一〇七八)、「五首五十首(忠)披講(教)披講せし中にこひを」(一一四二七)三首がみえ、また拾玉集には「左將軍女房八人に百首よませて披講の夜五首ありけるを安成にかはりて」と詞書して春夏秋冬恋五首がある。良経の夏歌は新古今卷二夏部に「五首の哥人々によませ侍りける時、夏の歌とてよみ侍りける」という題詞で入集し、慈円の秋哥も「題しらす」として巻四秋歌上に入集している。新勅撰集卷一春上の「おなし家に女房の百首の歌講し侍りける日、五首の歌よみ侍りけるに」とある藤原成宗の歌もこの時のものである。(注11)また、新古今卷二春下の「拱政太政大臣家に五首歌よみ侍りけるに」の題詞をもつ俊成の「またや見ん」の歌もこの

五首歌と思われ、寂蓮法師集の「五首左大臣家会」とある四季恋五首もこの時のものと見てもよい。ところで拾遺愚草下では「建久六年二月左大将家五首」として春夏秋冬恋五首がみえる。これらの五首の歌が同一の催しであるならば女房百首披講も建久六年二月ということになる。これについて諸先学の処理をみると、有吉保氏は建久四年秋（後番歌合）として八条院六条、高松院右衛門佐、寂蓮の三首をあげ、建久六年二月良経家五首歌として俊成・良経の新古今入集歌をあげていられる（注12）また藤平春男氏は右の有吉氏の四年後番歌合の寂蓮詠に疑問を付し、さらに良経家五首歌の新古今入集歌三首（良経・俊成・慈円）について「拾遺愚草の建久六年二月の五首歌が女房百首披講の五首歌と同一の催しならば、新古今集中の三首は一括できるのである。時期的に同じ頃なので、その可能性が考えられるので疑問を存しつゝ一括した」（注13）と処理されている。建久四年の後番歌合女房百首を認め、また建久六年二月の五首歌を認めるわけであるが、女房百首が二度催されたという確証はなく、女房百首は拾玉集にあるごとく女房八人（女房八人は勅撰集にみえる小侍従・八条院六条・高松院右衛門佐・股富門大輔のほか、森木氏のあげられた三河内侍・二条院讃岐・皇嘉門院別当・宜秋門院丹後を想定するのが妥当と思われる。）によるかなり規模の大きいものであり、かつ百首披講後の五首歌も「五首の哥人

々によませ侍りける」（新古今二二〇題詞）という人々の範圍はかなり広がったと思われ、良経・慈円・俊成・定家・寂蓮・成宗の五首歌は同一歌合の詠と認めてよいのではなからうか。六百番歌合が治承二年右大臣家百首の催しを意識していたことは、歌題の撰定・披講の形式などからは、確かと思われ、既述のごとく右大臣家百首後番歌合の催しを想起するとき、六百番後番歌合を想定することは可能性も大きく、また極めて魅力的であるが、前記五首題歌が同一歌合のものであると認め、拾遺愚草の年次注記が誤りでない以上、女房百首披講および五首題歌は建久六年二月の催しとなり、建久四年後番歌合の存在は否定せざるを得ないのである。

この年九月十三夜、慈円・良経は五首歌を贈答している。月清集には「八月十五夜座主のもとより」と題詞がついているが、慈円の君にとはむなか月のよの月やこれくらぬ空に秋を（ついで）いさめ（ついで）の歌からみて拾玉集の詞書が正しく、月清集の誤りとすべきである。月清集にはこの五首のうち第二首・第五首目の贈答歌を入れている。（二二〇―二二〇五）

同十月八日、初雪の朝良経は慈円に十首歌を送り、慈円唱和、良経の歌は「はつ雪の空」一句をこめ、慈円は「はつ雪の庭」で答えているが、月清集には一首もとられていない。（家集不見歌52―61参照）十一月八日、良経のうばの尾上（中宮任子の外祖母）が東山

光明院で没し、慈円・良経贈答二首歌あり、(家集不見歌62・63参照)また、この年冬雪の朝、良経・定家贈答五首がある。(家集不見歌64―68参照)

建久五年(一一九四)夏、良経邸で名所題十首歌合が催された、

歌題は志賀浦春・泊瀬山春・立田川夏・宮城野秋・須磨関秋・深草里冬・春日山夏・三嶋江恋・清見鷺浜・浮田杜若十題で、参加歌人は良経・慈円・定家・夜連・家隆・隆信・頭昭、二条院讃岐が認められているが(注14)頭昭が加っているのが注目される。良経詠は泊瀬山春(一〇三四)、宮木野秋(一一八九)・阪磨関同(月教)(一〇)・深草里冬(一三三二)・春日山を祝によせてよみけるに(三九六)・三嶋江恋(一四二五)が月清集にみえる。八月十一日、中宮御所で初度管弦和歌合が催され、歌題は月契秋久一首で、関白兼実以下公卿殿上人三十三人の盛大な雅事であった。良経詠は月清集一三九二にある。八月十五日、良経邸で三首歌合が催された。歌題は見月思旅・対月問昔・月契潤月三題であるが、この歌合の歌は拾遺愚草三首と隆信集に一首みえるのみで、良経詠は不明である。この月良経は慈円と百首歌を詠み結番、南海漁父、北山樵客歌合(月清集五〇一―六〇〇)を催している。

建久六年(一一九五)二月二十九日、良経は公卿勅使として伊勢

に向けて出発し、途次逢坂山・野洲で詠歌(月清集一四八一・八二二)・三月四日伊勢神宮に参詣し一首詠歌(一五八一)・また定家も扈從して鈴鹿関および外宮で詠歌している。八月十三日、中宮任子に第一皇女誕生、同十九日、兼実主催の御座和歌が催された。月清集に「今上一品宮むまれさせたまひての七夜に入々盃とりて詠<sup>ける</sup>せしに」(一三九二)と詞書する一首はこの会の歌である。また、九月廿三日、慈円は無動寺大乘院に勧学講をおこした。(玉葉同日条)「前大僧正慈鎮天台座主になりて勧学講といふ事をおこしおこなひ侍りけるを聞きてつかはしける」(続後撰集卷十釈教)とある良経の歌はこの時期のものということになるが、この歌は拾玉集贈答十首歌の一首で、門下槐樹とあり、建久七年秋の詠である。この月十一日十日、良経は内大臣に任せられたが、これ以前に催されたと思われる歌合、歌合がある。拾玉集に「緇素歌合十首<sup>孟宏兼軍御歌</sup>」とあるもので、歌題は禁庭殘菊・田家時雨・深山落葉・野徑寒草・海辺千鳥・湖上水鳥・旅宿初雪・故郷冬月・古渡寒水・山家歲暮・月清集には田家時雨(一三〇四)がみえる。(隆信集に「後京極殿にて十首歌合侍しに田家時雨」とあるのもこの時のものか。)また、拾玉集に「左大将の亭にて三首歌俄に入々よみければ」と題詞のある朝見初雪・夕聞時雨・昼夜思恋三首があり、月清集の昼夜思恋(一四二二)はこの折の歌と思われる。この年の秋良経が末句十を書

き出して当座十首歌を詠ましめたことは前に述べたが、おなじころ良経邸で五首歌会が催された。歌題は秋色・秋声・秋香・秋情・秋恋五題（拾遺愚草）であつたが、良経詠は不明である。十二月十四日慈円は舍利報恩会を催し、兼実・良経・寂蓮ら出席、後詩歌会が催され、詩題皆令人仏道・歌題雪中間法で（寂蓮法師集に舍利報恩講、雪中間法一首がある。）あるが、良経詠は不明である。

この年良経はしばしば詩会を催している。こゝで建久期の詩行事について述べておきたい。建久期、良経は和歌とともに詩にも関心強く、建久二年三月十七日、良経は親宗等と図つて内裏で詩歌会を催そうとし能保の鬱憤によって停止したことがあるが、同年八月十三日、良経邸初度作文管弦和歌会（明月記）を催し、また建久五年には三月四日良経邸作文会（玉葉）、七月七日作文会（玉葉）を催している。後者の題は後会只期秋で兼光、光雅、定長、基親その他殿上人儒士あわせて廿余人の会である。建久六年八月廿九日、兩篇詩会（三長記）、題は秋思入湖山・秋日山寺の兼日題で、被誦後連句、掩韻当座詩を行なっている。密々の会であつたらしく長兼は「人数非広」と記している。同九月三日掩韻を催し、長兼と文談教別を過し、（三長記）同九月九日重陽作文会（玉葉・三長記）、題は菊芳妓女家、参会者は公卿親宗以下三人、殿上人親因以下五・六人、儒士在茂以下七・八人で、この作文会の良経の詩は優れていた

らしく、長兼は「幕府御風情抜群同断也」と記している。同十三日良経邸作文会、同十七日作文会、題秋日言志、参会者は近臣二・三人と儒士宗業・為長・成信である。後掩韻・当座詩を催している。同廿一日良経邸詩講、題雨降林野變、その後連句、当座詩。同九月三十日良経邸九月尽作文会、題送秋小隠家といった具合で、三長記の記事は建久六年八・九月に集中しており、建久期後半の良経の詩愛好はまぎれもな事実であり、恐らく建久期を通じて近習・儒士輩による作文会が行われていたであろうことは推察に難くない。その点旧稿の誤りを訂正しておきたい。たゞ公式の会、例えば初度作文管弦和歌会や兼実家詩歌会には詩と和歌が詠まれているが、（もつとも詩披誦後和歌披誦が行われるのが普通である。）良経邸での作文と和歌会とは全く別に営まれていた模様で、両者の交流を図ろうとする傾向は正治以後顕著にあらわれてくる。

建久七年（一一九六）三月一日、良経は大臣後初度作文和歌会を催している。和歌題は松不改色（月游集一三九九）一首で、歌人は季経・隆信・定家・保季らで、定家は「心中無興、祝歌弥不趣無術」と記している。翌三日、兼実・良経は中宮と共に宇治に赴き、三日宇治平等院で一切経会を催した。玉葉によると四日舟遊びの予定であつたが、雨のため延引し、五日舟遊びを催し、後平等院で詩歌

会また当座会を行なっている。月清集では「宇治平等院にて一切経会後朝の会に」(一〇四四)「同日当座会依花客留といふ心を」(一〇四五)「又の日中宮のナレ教の女房とも舟にのりて公卿殿上人など物のねならしてあそひけるにはてつかた人々舟中見花といふ事(ナレ教)をよみけるに」(一〇四六)と宇治での詠三首が並んでいるが、玉葉の記事と異り、一切経会後朝会は舟遊びの前日に催されたことになっている。日記という性格から事実には玉葉の記事を信すべきであろう。九条家の最も優雅な繁栄の一時期の風景である。

同年七月廿一日、良経邸で三首和歌会が催された。歌題は昨日今日・今日微雨・明日逢恋(拾遺愚草)であったが、良経詠は不明である。九月十三夜良経邸月五首会、未出月・初昇月・停午月・漸傾月・入後月(一一九五—一九九)で一夜の月の経過の趣を探ろうとする試みである。同十八日良経は定家に韻哥百二十八首を詠ましまわっている。

この年の十一月二十五日政変以前に催された和歌行事として編纂十題歌合が挙げられる。拾玉集によると歌題は薄暮卯花、曉更廬橘、古池菖蒲・遠山郭公・風前夏草・雨後夏月・所々照射・家々納涼・蛩声夏深・螢火秋近で寂蓮法師集には「内大臣殿座主御十首の歌合あるへしとて」と題詞のある十題十首の歌がみえるから良経・慈円の歌合は建久六年十一月任内大臣以後、恐らく建久七年夏であった

と思われる。拾玉集には同題十首歌が二度あり、一度は「但不被遊」と注記があるから「又人にかはりて」と注記のある十首がこの歌合のものか。良経の歌は月清集に薄暮卯花(一〇六〇)、曉更廬橘(一〇六一)古池菖蒲(一〇八〇)家々納涼(一〇八七)雨後夏月(一〇九二)螢火秋近(一〇九九)六首がみえる。またこの年秋、良経、慈円に十首を送り、慈円唱和した十首歌から五首の贈答を選んで月清集に入れている。(一二四〇—一二四九)(なお残り五首については家集不見歌69—73および注2参照)

治承題百首は符て久保田淳氏が指摘されたごとく、建久六年三月以後、建久七年十一月の政変以前の詠とみられる。(注15)

十一月二十三日、中宮任子は内裏を出て八条院に移った。兼実は同二十五日関白を辞し、良経も同日管居、翌二十六日慈円も兄兼実に従って天台座主・護持僧を辞した。この政変が親幕派としての兼実の宮廷での失脚であり、政敵通親一派の策謀によることは明らかである。良経は内大臣にとまっていたものの名のみで九条家は悲運の底にたゞきつけられた。十二月二十六日、慈円・良経は二首の贈答を行なっている。拾玉集から引用すると、  
(注四)

ふかきかみにまどふところそなかりけるたのむ日吉のかけをまつとて(五八七八)

としのくれてかみよりかみにうつるかないつかいつへきわか春の

日は(五八七九)

御運事 (良経)

世のひとのさなからくらさなかにゐてわか春の日をさりともの  
み (五八八〇)

わかたのむ日よしの影は君ゆへにいとやみなくならむとやす  
(五八八一)

暗雲たれこめた九条家の将来を思うとき「いつかいつへきわか春の日は」と嘆かざるを得ないのであり、良経は「わか春の日をさりとものみ」と詠じ返しても、嘆きは同じであったのである。この冬の雪の朝、良経・慈円はさらに一首を贈答している。(家集不見歌76)かくて九条家の雅事は影をひそめ、良経歌壇は沈黙し、建久八年和歌行事が行われた形跡はなく、建久九年になっても和歌の催しはない。建久九年正月、通親は養女承明門院在子の生んだ土御門帝(四才)を位につけ、同時に院別当となって宮廷、院双方の実権を握り、良経は後鳥羽院讓位からんで一月十九日左大将を辞した。述懐的悲嘆の調をもつ良経の西洞隱士百首(六〇—一七〇〇)はこの時期の詠で、政変以後、おそらく同八年以降正治初年までとされる久保田淳氏の推定に従うべきである。(注15)

良経が前斎院御所から歌を贈られたのは建久九年春であったと思われる。大炊御門斎院御所は政変まで兼実が住んでおり、吉田経房

郎や七条坊門大納宮旧宅を御所とされた式子内親王がその後に移り住まれたわけであるが、その時期は明らかでない。玉葉建久八年三月十六日条に「從二院院、遷三御大炊御門斎院御所云々、或云為三

蹴鞠云々」とあり、(家長日記の斎院御所の回想記事はこの折のものである。)建久八年三月には既に斎院御所であったわけで、仮りに建久八年初春移されたとしても歌の内容から九年春以後の詠

であり、正治元年五月一日あたりから御病気の由がみえる(明月記)からまず九年春とみてよいであろう。月清集ではこの贈答は

前斎院大炊御門におましは(教)けるころ女房の中よりやへさくらにつけて

ふるさとのほるをわすれぬやへさくらこれや見しよにかはらさるらむ(一〇四二)

返し  
やへさくらおりしる人のなかりせはみし世のはるにいかであはまし(一〇四三)

とあって、前斎院女房から贈られたことになっている。統後撰集卷二春部中では「後京極摂政大炊殿に早うすみ侍りけるをかしに移りて後の春八重桜につけて申し遣しける式子内親王」とあり、万

代和歌集第十四にも「後京極摂政のもとに八重さくらをつかはすとて式子内親王」とある。(頭注に「統後撰題詞」とある。)題詞か

とある。

らみて為家は月清集によらず、式子内親王側からの詠草として続後撰集に入れたと思われ、月清集は定家本・教家本諸本とも同一であるから、月清集にはもともとそうあったわけで、あるいは良経は贈歌の使いの口上をそのまま信じたのであったかもしれない。

政変による篁居以後、良経家の雅事は絶えて行われることはなかったが、この間良経は徒然のまゝに自歌の過去の詠の整理や、他の歌人の詠を読んで目を送っていたようである。後京極殿御自歌合・慈鎮和尚自歌合の結番はこの期のもものと推定されるが、月清集一五三六・三七の俊成との贈答一首もこの期のもので一五三七は自歌合に入っており、神宮文庫本によると、九七番右に

(類従本・ナレ)  
百首習書出て給ふへきや三位入道の許へ消息して侍りければ書て送るとて、成家朝臣が作輪の事なとありておくに

秋のとき捨てし苔のむれ木をうれしくもとふ松の風哉

と侍ければ返事に  
君かとふかひなき比の松のかせわれしも花をよそに聞哉  
とあって、良経は俊成に百首歌を書き出して送るよう依頼している。右の贈答歌の内容からこの歌は政変後、自歌合成立以前の詠である。

篁居中の建久九年五月二日、良経はこれまでの自歌から二百首を撰んで百首歌合として結番し、俊成の判を乞うた。後京極殿御自歌

合と呼ばれるものである。この自歌合によって、これ以前の詠と認められる歌を月清集歌番号で示すと次のとおりである。

一〇〇四・一〇二七・一〇二八・一〇三三・一〇四九・一〇五三  
・一〇五五・一〇五六・一〇九三・一一〇六・一一五九・一二一六  
・一二一六三・一一七三・一一八〇・一一八三・一二〇六・一二  
一一・一二三〇・一二五八・一二六二・一二七〇・一三〇九・一  
三一二・一三一九・一三二五・一三三三・一三三六・一四二二・  
一四二九・一四三一・一四三三・一四八〇・一四八三・一四八四・  
一五一七・一五二〇・一五三七・一五七九・一五八〇・一五八四  
慈鎮和尚自歌合は跋文によると良経の結番したもので内部徴証からその第一次成立は建久九年十二月九日以降六月二十二日以前とみられる(注16)からこの自歌合に結番された良経の自歌日吉七社(一五八八―一五九四)七首はそれ以前の詠となる。

注1 神宮文庫「文治二年西行法師歌集 二見浦百首拾遺」また、久保田淳氏

「藤原家隆詠歌年次考」(「藤原家隆集とその研究」昭43年刊)

注2 月清集引用は定家本により、教家本で校異を示す。歌番号は古典文庫秋篠月清集による。

注3 拾玉集は多賀宗集氏「校本拾玉集」(昭46刊)により、歌番号も同書による。

注 4 原田芳起氏「後京極摂政と三十六番相撲立詩歌」(櫻蔭園文学第1号)

文学第1号)

注 5 「後京極良経の作歌活動―特に建久期にかぎって―」(語文第37輯)

注 6 久保田淳氏「建久元年の新進歌人たち」(白百合女子大学研究紀要第4号)に詳細な考察がある。

注 7 安井久善氏「玄玉和歌集攷―その成立と撰者」(「中世私撰和歌集」昭25)

注 8 拾遺愚草は冷泉為良氏「藤原定家全歌集」(昭15刊)により、歌番号も同書による。

注 9 「六百番歌合の成立事情について」(国文学研究第24集)

注 10 「殷富門院大輔考」(和歌文学研究第17号)

注 11 青木氏、前掲「後京極良経の作歌活動」に指摘。

注 12 「新古今和歌集の資料と撰者」(「新古今和歌集の研究」昭43刊)

注 13 「建久期の歌壇と新古今集」(「新古今歌風の形成」昭43刊)

注 14 久保田氏、前掲「藤原家隆詠歌年次考」

注 15 「新儀非掬達磨歌の時代統考」(和歌文学研究第20号)

注 16 群書解題・和歌部第八「慈鎮和尚自歌合」項(桶口芳麻呂

氏)

### 三、正治、建仁期

正治元年(一一九九)六月二十二日、良経は左大臣に任ぜられた。もとより通親の政治的策略によるものであったが、また後鳥羽院の九条家に対する政治的配慮によるものである。同七月九日良経は院に参上、同十二月二十二日院より隨身を賜っている。もっとも実際に院に拜謁したのは翌二年二月十八日のことで玉葉はそのさまを「左大臣参院、始謁<sub>ニ</sub>竜顔<sub>ニ</sub>云々。披<sub>ニ</sub>五廻春霞<sub>ニ</sub>、拜<sub>ニ</sub>一人之天顔<sub>ニ</sub>、拭<sub>ニ</sub>感涙<sub>ニ</sub>催<sub>ニ</sub>懐旧<sub>ニ</sub>云々。」と伝えている。政治的策謀家、当世実力第一の通親が反对勢力としている以上、良経の前途もまた多難であったが、ともあれ良経の任左大臣によって九条家に再び春が廻ってきたわけである。定家は「終日在<sub>ニ</sub>御前<sub>ニ</sub>、乃聞<sub>ニ</sub>此事<sub>ニ</sub>、心中欣悦無<sub>ニ</sub>一物取<sub>ニ</sub>こ喻<sub>ニ</sub>。」と述べている。かくて九条家の雅事は再び催され始める。院歌壇の動きが始まる正治二年九月の初度百首までの九条家関係の詩歌行事をあげると次のごとくである。

正治元年(一一九九)

8・11 良経邸で密々詩歌を講ず。(成信・知範・定家)

12・2 兼実邸で詩歌会が催され、後定家に和歌題十を賜る。

(詩題野徑雪深・遊月後朝、良輔・為長・成信・知範・定家)



12・7 良経邸で文会。(兼日題年光似流水・当座・雪飛隠士

家、有家・長兼・為長・成信・成定・知範・定家)

この冬、良経邸冬十首歌合の催しあり。

正治二年(一一〇〇)

1・25 来る廿八日良経邸詩歌会。

1・28 良輔春日社参詣のため詩歌会を二月二日に延引。

2・9 良経邸で詩歌会を催す。(詩題春作四時始、時光範・親

通・資光・有家・定家・長兼・宗業・為長・成経・高範・知範

・歌季経・隆信・保季・業清・有家・定家・長兼・為長・成経

・知範)

2・11 良経邸で密々作文あり。(題雨中対花柳当座、公継・長

兼)

2・22 良経、良輔八条院宿所で詩筵を開く。(題花開遊宮中)

2・23 定家、良経に十題歌合の料を詠進する。

2・25 良経邸で良経、定家と右方歌を撰び、後良経・定家、兼

実邸に赴き和歌会を催す。題待華日暮・春夜増恋、隆信・寂連

・定家ら)

閏2・1 良経邸で十題甘番撰歌合を催す。(左方良経・隆信・

保季・宗隆<sup>家隆</sup>・寂連・業清・右方兼実・慈円・有家・定家・頭昭

・丹後、その他に能季・資家出席、判者季経)

閏2・18 良経邸で作文あり。(題花色古今同)

閏2・21 良経、法成寺で詩歌会を催す。題春日山即事、詩作良

経・良輔・有家・以宗<sup>定家</sup>・長兼・為長・成信・信定・知範、歌題

山花・滝水、歌人良経・季経・良輔・隆信・有家・定家・長兼

・信定)

閏2・23 良輔、欲喜光院にて詠歌す。

閏2・28 兼実・良経大原来迎院に行きて宿し、良経、詩歌を講

す。

3・12 良輔、俄に詩を講す。(題山中春景深、良輔・定家)

3・30 良輔、定家に詩を詠ましむ。(題春光残一夜)

4・6 定家、季経判の歌合を辞する假名状を書き、季経大いに

怒り、良経に訴え、良経、定家を叱責。定家病と称して寤居

す。

この時期、九条家の雅事がかかり頻繁に催されていることが知られるが、建久期に比して良経の環境が大きく変ってきている。任左大臣によって良経は九条家の中心となり、衛士近臣も多くなり、今一つ弟良輔が成長し、特に詩を好んだこともあって、(良輔は建久七年三月一日、良経大臣初度作文和歌会に十二才ではじめて詩筵に出席している。)作文や詩歌会がしきりに催されていることである。そして良経は定家にも詩作をさせている。定家は建久期の和歌におい

て漢詩を撰取することも多かつたし、後年詠歌大概で「雖非和歌之先達、時節之景氣、世間之盛衰、為<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>物由<sub>一</sub>」、白氏文集第一第二條常可<sub>レ</sub>擬<sub>二</sub>和歌之心<sub>一</sub>と述べているが、詩を詠むことは和歌の心に通ずる故であり、従つて當時にあつて詩作そのものは定家の本意ではなかつたと思われる。明月記前掲十二月二日の條に「此等事其無興」といふ、かゝる近臣儒士を「交衆不<sub>レ</sub>異<sub>二</sub>禽獸<sub>一</sub>」と痛罵しているのも、そうした違和感にもとづくものであつたと思われる。十二月七日にも「今日文会殊無<sub>二</sub>心隙<sub>一</sub>之上、題無<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>案内<sub>一</sub>之間、迷<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>、心中極無興、交衆痛多、雖<sub>レ</sub>然愚作經<sub>二</sub>御覽<sub>一</sub>、多直<sub>レ</sub>之、猶可<sub>レ</sub>交<sub>二</sub>其疑<sub>一</sub>之由有仰、仍懲<sub>レ</sub>背<sub>レ</sub>之。」と述べているし、また翌二年二月九日の條では「文人等漸參集、秉<sub>レ</sub>燭以後有<sub>二</sub>詩講<sub>一</sub>、式部大輔、親通朝臣、資光朝臣、有家<sub>レ</sub>、予、長兼、宗業、為<sub>レ</sub>長、成經、高範知範等也、皆以<sub>レ</sub>才子也。一人極見<sub>レ</sub>苦云々」とあり、同二日「今日詩遊、極雖<sub>レ</sub>深、愚事<sub>二</sub>似<sub>レ</sub>無興<sub>一</sub>、又可<sub>レ</sub>表<sub>レ</sub>不堪<sub>レ</sub>之由<sub>一</sub>、仍<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>座、諷吟」とくり返しその苦痛を述べている。しかし和漢兼作の良経に從つて定家はこの時期詩歌会に出席し、この頃から仕えるようになった良輔の詩愛好もあつて定家は盛んに詩作を試み、同二年三月一日の良経邸での成信・業清・信定・知範・範房ら良経近臣の詩会に連らなり、翌二・三日と両日替て不<sub>レ</sub>異<sub>二</sub>禽獸<sub>一</sub>と稱したこれらの人を自宅に招いて詩歌を催してもらるのである。(注一)良経をとりまく近臣文

人がこの後も変らなかつたことは、例えば元久二年四月良経邸で企画された詩歌合(後に院が参加し元久詩歌合となる。)での詩人十名、良経・良輔・資実・親経・長兼・為<sub>レ</sub>長・宗業・成信・孝範(注2)・信定の殆どがこの期の文人と重なり合うことによつても明らかである。ともあれ、正治元年良経の任左大臣を「心中欣快無<sub>二</sub>物取<sub>一</sub>咄」と喜び、前途に期待をかけた定家であるが、少くも和歌に因つて良経家の雅事は期待を裏ぎるものであつたと思われる。か

て加えて六条家歌人の九条家復帰である。建久七年政変以後近衛家に出入りしていた季経・経家らは再び九条家に出入りを始める。しかもともと兼実歌壇のメンバーであつた六条家歌人達は、今や任左大臣によつて九条家当主となつた良経主催の雅事に出入りするわけである。(建久期良経歌壇に六条家歌人が出詠しなかつたわけではなく、公式の例えば建久七年内大臣初度作文和歌会に季経・保季が出席し、また建久元年花月百首に有家・季経? 出詠、建久二年十月三日五首歌合は季経が結番しており、建久四年六百番歌合に季経・経家・有家・頭昭出詠、建久五年名所題十首歌合に頭昭が出詠しているが、建久期の良経・慈円・定家・寂蓮の新風和歌形成の紐帯を想起すべきである。)正治二年閏二月一日十題廿番撰歌合に因つて定家は「歌合之儀頗雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有興、判者之昧、次第之儀頗無<sub>レ</sub>詮歟。」と不満を述べ、やがて四月六日「如<sub>二</sub>季経等<sub>一</sub>系せ歌詠判之

時、難<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>之由云々」の仮名状となり、良経から叱責を受けるに至るや、常軌を逸した行動もかゝる背景から起ってくるわけであつて  
明月記同九日の条

境節籠居之由人々沙汰之山、或人告之。但何為哉。不惜身命雖<sub>レ</sub>存忠節、大小内外不<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>存。親雅、季経譏言被<sub>レ</sub>信用、被<sub>レ</sub>處理、賢人也、公卿也、可<sub>レ</sub>信可<sub>レ</sub>貴。其無益之世也。飛鳥尽而良弓藏、狡兔死而走狗烹、共憂不<sub>レ</sub>共樂<sub>レ</sub>者、越王為<sub>レ</sub>人也。凌雨步行進退是苦、仍籠居耳

という記述は聊か興奮気味の自棄的な文面であるが、逆に云えば良経と我との紐帯を信じていたに拘らず、それを裏切られた定家の憤激が赤裸々に語られている。

ともあれ、正治初年冬十首歌会・十題廿番撰歌合が催されているもの、良経家の雅事、作文・詩歌会がそれ以上にしきりに催されていることは前述のごとくであるが、注目すべきは詩歌合がこの時期に登場してくることである。明月記によると、正治二年閏二月二十一日

午終殿下(兼夷)御<sub>レ</sub>法性寺、騎馬御共、小時大臣殿中、兼御、季経卿、陸信朝臣、有家朝臣、長兼東帯、為<sub>レ</sub>長成信等依<sub>レ</sub>召參入、於<sub>レ</sub>新御所<sub>レ</sub>出題、各評定云、今日詩与歌被<sub>レ</sub>合、可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>興。予申云、不堪物尤可<sub>レ</sub>候<sub>レ</sub>一身。但大臣殿令<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>一紙<sub>レ</sub>給、下<sub>レ</sub>給衆中、各被

見、

詩題 春日山寺即事新撰人撰、此歌字被<sub>レ</sub>引為<sub>レ</sub>長一

歌題 山花、流石

詩作者 左大臣(良経) 右中将(良輔)、有家々々、以宗々々、

(定家歌) 長兼・為<sub>レ</sub>長・成信・信定・知範

歌人 左大臣・季経卿・中将(良輔) 隆信朝臣・有家々々、定

家々々、長兼、業清、信定

各披<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>之、即飄吟不堪、兩方極無<sub>レ</sub>術。(中略) 及<sub>レ</sub>晚頭<sub>レ</sub>雷鳴、

以後賦<sub>レ</sub>詩、殿下召<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>之、結審御清書、信定又給<sub>レ</sub>之書。持不<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>尋<sub>レ</sub>也

御所<sub>レ</sub>和乘<sub>レ</sub>獨以後被<sub>レ</sub>譏、是儀評定之間、雷雨大風、掌燈頓滅之間、下<sub>レ</sub>格子<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>内被<sub>レ</sub>譏訖。(下略)

とあつて、「各評定云、今日詩与歌被<sub>レ</sub>合、可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>興」という記述からみて詩歌合の最初の催しであつたとみてよい。そして良経は自ら出題結構するのであつて、この催しは良経発議によることが明らかである。また十二月九日の条に

天晴、依<sub>レ</sub>寒風<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>術、雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>、終日偃臥。西時許有家朝

臣重示<sub>レ</sub>召出、乘<sub>レ</sub>燭<sub>レ</sub>之程、騎馬參<sub>レ</sub>法性寺御造作所、詠四首歌詩、

大抵<sub>レ</sub>三位<sub>レ</sub>歌、殿<sub>レ</sub>陸信、予<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>三六韻詩四句、被<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>四首歌、勝負評定<sub>レ</sub>、夜半許御共帰、即退下。冬日於<sub>レ</sub>山家即事、歌、山家雪、

山家米、山家歳暮。

とあり、閏二月一日の詩歌合が大平和漢兼作で絶句第二・三句を和歌二首と番えたに対して、この度は各句を四首歌と番え、詩作、歌人を分かつている。しかし詩題と歌題は別であつて、尚遊戯的要素が強いものである。こうした詩歌合はあるいは良経の三十六番相撲立詩歌に端を發したのもかもしれない。良経の三十六番相撲立詩歌は曾祖父忠実が基俊に命じて撰ばしめた長承二年相撲立詩歌の形式を踏んで、自詩歌を三十六番に結番したもので、三十六首の歌はすべて後京極御自歌合中の歌であり(注3)(詩の方は文治六年女御入内屏風詩以外の年次不明)少くも建久九年五月二日以後の撰と考えられるが、正治初度百首を含まず、これ以前と考えてよい。これ以外に根拠はないわけであるが、建久九年良経は百番自歌合を結番するとともに慈鎮和尚自歌合を結番しており、三十六番相撲立詩歌はあるいは百番自歌合の發展として長承二年相撲立詩歌に範を求めて自詩歌合を企図したとも考えられ、建久九年五月二日以降、正治元年六月左大臣以前の筈居中の撰と思われるのであるが、なお、断定はさし控えておきたい。

この期の和歌について、正治元年冬の十首歌合の詠は月清集に「家哥合に」の題詞で、寒樹交松、池水半氷、山家夜霜、関路雪朝、水鳥知主・旅泊千鳥・羈中晚嵐・湖上冬月・如迎懐旧・寄茂葺恋(一二八五—一二九四)十首がある。また正治二年閏二月一日十題廿

番撰歌合の詠は「家哥合に」また「家撰哥合に」「家の撰哥合十首内」と題詞して曉霞(花教)(二〇二二)朝花(二〇二二)暮郭公(二二七二)山月(二二五七)野風(二二五八)庭雪(二二八四)春祝(二四〇八)夏恋(二四六一)秋旅(二四八五)冬述懐(二三三八)十首がみえる。(注4)

この年七月十三日、良経室(能保女)が逝去した。良経は悲嘆のあまり、兼実が南殿に移るよう使を遣ること十余度に及んだが、返事もしないほどで、翌十四日夜漸く南殿に移った。その夜半、良経は慈円と相伴つて修行に出、兼実は停止の使を出し、仏曉山崎辺から引返すという事件があった。「乗車直向山崎一給、是修行事深染意、以此次可遂之由思余給。」(明月記)とあるが、もともと良経には隱世への志向があり、それが妻の死を契機に噴出したものか。もつとも貴紳良経はそれを實行する強さに欠けていた。定家は別の視点から、良経の行動について「此事頗無山事歟。世風聞不穩便歟。但此聞出来之後帰京、奉為彼可見苦歟。不可被止歟如何。」と批判している。この妻の死をめぐつて月清集には「機中をありしかとも忘るおなじころ三位入道のもとより」と詞書する一始百首家母うよたまひてのち(教)五六七・六八の俊成との贈答歌一首があり、また「としころのちきりはかなくなりてのち、その落所にゆきてよめるとか」と詞書する一五六五・六六の二首はこの秋の詠か。

正治二年秋、後鳥羽院の歌壇活動が始まり、正治初度百首が催さ

定に従うべきであろう。

れた。その噂がながれたのは良経逐電の七月十五日のことであるが、この催しはもともと六条家歌人―通親あたりで企画されたらしく、良経は関知していない。定家が出詠歌人から漏れ、俊成の和字奏状によって人故に加えられたことは周知の通りであるが、ともあれこの間に企画は拡大し、良経に詠進下令のあったのは有吉保氏の推定によると(注5)八月十五日で、以後詠作、定家にもみせ(九月五日)、俊成にもみせて(九月廿一日)、九月廿七日院に詠進した。

この百首(七〇―一八〇〇)は建久期の詠風に進展を加え、(定家は「殊勝不可思議也」と評している)良経百首詠の中で十七首という

院の催しである正治初度百首によって定家詠が微塵に叶い、即日内昇殿を許されることがあり、院の定家選進によって、これ以後新古今歌風の急速な躍進となるわけであるが、それは建久期良経歌壇新風の院歌壇吸収を意味する。例えば十月十一日院五首歌合において作者は院・慈円・定家・家隆・具親・寂蓮で、具親を除きながら建久期良経歌壇再現の観を呈している。もとより院歌壇は御子左家、六条藤家・院新進歌人を含めた一大歌壇を形成するのであるが、建久期良経歌壇歌人がその中核をなすのであって、良経歌壇は院歌壇吸収によって正治二年九月以降良経家では祝歌行事を除き、

最も新古今入來歌の多いものである。これより先九月廿三日、十首題を急ぎ詠進すべき山の命を受け廿七日詠進している。仙洞十人歌合の料である。この歌合は種々の問題を含み、特に院・良経・通親の成績の悪いこと(院勝3負5持2・良経勝0負5持5・通親勝0負8持2)から谷山茂博士は後鳥羽院を中心に良経・通親を加えた三人の衆議判とされ、正治二年九月廿七日(良経詠進)から十月五日(俊成に歌合を送付)の間を成立とされた。(注6)もっとも良経は十月五日まで妻の服喪で正式の出仕はしていない。谷山博士は十月五日除服までの間に密々参院したこともありえたのではないかと推測されている。良経の密々参院を否定する資料のない限りこの推

歌合・歌合等大きな和歌行事の催しはなされず、正治以後顕著となった和漢兼作の良経を中心とした詩歌会・詩歌合の催しが続くことになる。初度百首以後、院主催の和歌行事は頻繁に行われているが、良経は左大臣として大きな和歌行事しか出席していず、この年仙洞十人歌合に加わったばかり院和歌会に出席した記事はない。この時期から土御門通親邸で盛んに影供歌合が催されている。明月記によると正治二年十月十二日が初見で、以後毎月恒例(同十二月廿六日条)であったようである。通親の歌人集めがかなり強引だったことは定家が十月十二日心神懊惱して欠席、歌のみを送ったのに対し、十一月八日「内府影供送し題被し責。先度已意趣歌之由凶人等沙汰云

々、重置之条、殊無<sub>レ</sub>山、案之甚無<sub>レ</sub>益、須可<sub>レ</sub>順<sub>レ</sub>漁父之訓。」とあり、また同十二月廿六条「内府亭依影供也。毎月恒例衆極雖<sub>レ</sub>堪為<sub>三</sub>追従不能<sub>一</sub>固辭、入道殿令<sub>レ</sub>向給、九旬翁老人定<sub>レ</sub>嘲賦、可<sub>レ</sub>哀」と述べていることよって窺うことができる。院も最初からしばしば臨幸され、慈円も加わっているが、良経は通親邸影供歌合には一度も出席しなかった模様で、建仁元年院で影供歌合が催されるに及んで出席するようになった。

建仁元年（一一二〇）正月七日、院年始御会があり、良経詠は「院御会に」と題詞して初春祝（一一四〇九）松間鶯（一一〇二三）朝若菜（一一〇二四）三首がある。この年二月十六・十八日両日老若五十首歌合（九〇一一九五〇）が催され、良経の歌合成績は院に次いで勝三五負六持八・無判一（教家木勝負付は勝三五負七持八、ただし内容的に異同がある。今類従本による）と極めて好成绩である。同三月廿二日新宮撰歌合料の十首歌を来る廿八日詠進すべしよし下命あり、定家は廿七日詠進、同日良経も詠進したと思われる。翌廿八日撰歌が左方良経・通親・寂蓮・家隆、右方院・定家・雅経で行われ、良経の撰歌は七首である。右方は院の歌が多く入り、各人一首を入れる勅詠で院の歌は結局七首となったから右方は御製七、慈円六（類従本廿番左の名関は慈円の歌である）定家五などで、左方は

良経七、通親七・寂蓮四などで、院・良経・通親が各七首撰入し、翌廿九日新宮撰歌合では良経歌は勝負四負一持二の成績であった。月清集には○置<sub>（樹）</sub>藤<sub>（樹）</sub>遠<sub>（樹）</sub>樹（一一〇二二）○櫻中花（一一〇二二）○雨後郭公（一一〇六三）松下<sub>（樹）</sub>晚<sub>（樹）</sub>涼（一一〇六四）○山家秋月（一一一四）湖上<sub>（樹）</sub>曉<sub>（樹）</sub>霧（一一一五）○吹風寒草（一一二七二）雪似白雲（一一二七三）○寄神祝祝（一一四〇四）○遇不遇恋（一一四五四）（○印は撰歌合歌、なお教家木では一一〇二二・一一〇六四・一一一四・一一一五・一一二二・一一四〇四・一一四五四に勝負付はあり、撰歌合歌以外にも勝負付がなされている。）十首がある。同四月十九日、院は鳥羽南殿、二十一日鳥羽北殿に渡御され、廿六日鳥羽殿初度管弦和歌合が催された。歌題は池上松風（一一四〇三）一首である。同四月卅日、従来通親邸に催されていた人丸影供が鳥羽殿に移されて院影供歌合が催された。歌題は嵯山郭公（月清集なし）海辺夏月（一一〇六五）忍恋（一一四五五）である。（歌合と教家木で勝負の異同があり、一〇六五負一勝・一四五五持一勝となる。）（注7）同日当座御会二首が詠まれ、良経詠は「同御会当座に」として竹風夜涼（一一〇六六）山家五月雨（一一〇六七）が月清集にみえる。同年五月城南寺御所で歌合が催され、歌題は社頭祝言・雨中時鳥・野亭水涼三題（後鳥羽院御集）であったが、月清集には「院の城南寺御会に」として雨中郭公（一一〇七〇）野亭水涼（一一〇七一）の二首がある。同六月、百首詠

進の下令があり、良経はこの月詠進したものとと思われる。この千五百番歌合の結着の時期は不明であるが、明月記建仁二年九月六日条に「給<sub>レ</sub>歌合二卷、可<sub>レ</sub>判進一由被<sub>レ</sub>仰、去年百首歌也。判者十人、不知其人」とあり、これ以前に結着され、院が判者十人を定め下命されたものと推定される。(注8) この判は後鳥羽院は和歌で、

良経は七言二句で判詞とし、特に和漢兼作の傾向顯著で詩歌合、詩歌合を催していた良経の正治、建仁期の志向を如実に窺わせるものがある。同七月二十六日、和歌所寄人十一人が任命され、良経は筆頭寄人となり、翌二七日二条殿に和歌所が置かれ、和歌所御会始が行われた。この時の良経詠は「和歌所を<sup>和歌所御会</sup>かれて初度御会に松月夜深」(一四二〇)である。次いで当座御会、暮山遠雁(後鳥羽院御集、

明月記)が詠じられたが良経歌は不明である。同八月三日和歌所初度影供歌合が催され、六首題で月清集に初秋曉露(一一二九) 閑路

秋風(一一三〇) 松月閑鹿(一一三一) 故郷虫(一一三二) 初恋(一四五九) 久恋(一四六〇)がある。八月七日、良経は院より命じ

られて後撰、拾遺兩集から百首を撰出しており、(明月記)新古今撰集の近きを思わせる。同八月十五夜、撰歌合が催された。これに先だち十四日良経は左方歌を院・寂蓮と撰歌している。良経歌は○月多秋友(一一二六) ○月前松風(一一二七) ○月下拈衣(一一一八) 海辺秋月(一一一九) 湖上月明(一一二〇) 古寺残月(一一二二)

・深山曉月(一一二二)・野月露涼(一一二三)・田家見月(一一二四)・河月似水(一一二五)十首で○印七首が撰歌され、撰歌合の勝負は勝五持二である。(教家本では撰歌合に撰ばれていない一一一九、一一二〇に負と勝負付がある。)次いで当座御会三首があり、

良経詠は「同夜当座御会に月前雁」(一一二六)「院影供のついでに当座月前旅を」(一四八八)「同影供当座に月前恋」(一四五六)と詞書している。一四八八は新古今九四一に「和歌所月十首歌合のついでに月前旅といへる心を人々つかうまつりに」と題詞があり、一四五六は新古今一二八二に「八月十五夜、和歌所にて月前恋といふことを」とあり、諸注月清集題詞により影供歌合当座会の詠として、(注9)月清集に「院八月十五夜撰歌合十首哥」の後に「同夜当座御会に月前雁」とある一一二六の題詞が正しく、一四五六・一四八八の題詞は月清集部類の際誤って書き入れられたと見るべきであろう。

この年九月、院句題五十首が催された。(月清集九五一一〇〇) ○明月記に「五十首御歌他人不<sub>レ</sub>入其<sub>レ</sub>中云々」(九月廿六日条)とあり句題五十首は良経が院に進めた歌題である。十月十七日、宜秋門院出家(明月記・猪原因白記)これについて「宜秋門院御さまかはらせ給てつきの日、座主のもとより」として慈円・良経二首贈答が月清集(一一五五六―五九)にある。拾玉集は正治二年以降の良経と

の贈答歌を載せていないが、これ以後も両者の間にことにつけ贈答歌が交わされていたことが窺われる。(注10)十一月三日、上古以来の和歌を撰進すべきよしの院宣が下された、十二月二日、鳥羽殿で影供歌合が催され、歌題は寒夜冬月・山家暮風・初窓三題であった

が、家集には「院影供に寒夜冬月」(二二七六)一首のみがみえる。この年九月九日、良経は重陽詩会を行った模様である。月清集には中宮大夫との贈答歌五首がある。(夏部「五月五日中宮大夫のもとより菖蒲のなかきねをくくりける返事」(二〇八二―一八三))

秋部「九月九日作文侍ける時、中宮大夫詩をくくるへきよしかねて侍ける、その日になりてをくらしりければ後朝につかはしける」という題詞のある一連の歌(二二五〇―一五六)である。この中宮大夫は同一人と思われるが、中宮大夫は任子入内と共に建久元年四月

廿六日兼房が任じられたが、同年七月十八日任左大臣により辞し、同日良経が中宮大夫を兼ねた。良経は建久六年十一月十日、任内大臣により辞退し、同日家房が中宮大夫となったが、翌七年七月廿二日逝去、その後中宮大夫は空席のまま、おかれ、正治二年三月六日兼良が任じられた。久しく権大夫の地位にあった公継が望んでいたが叶えられなかったよし明月記にみえる。従って九月九日、中宮大夫でありえたのは兼良以外になく、五月五日菖蒲の根を送ったのは正治二年兼良が中宮大夫となった年の可能性があり、正治二年九月九

日は良経は服喪期間中であり、初度百首詠進時期でもあって作文会が催されたとは考えにくく、歌人兼良が作詩に難渋している様子から任中宮大夫まもなくとみれば建仁元年が最も蓋然性がある。

建仁二年(二二〇二)、前年十二月十日、良経母が逝去し、良経服喪、二月十一日復任した。(公卿補任)したがって前年十二月廿八日石清水社歌合、二年正月十三日和歌所御会、二月十日和歌所影供歌合には出詠していない。二月十七日、かねて九条邸内に造営していた新御所が完成し、良経は新所に移った。月清集に「渡新所之後はしめたる会に松近路友」(二二九四)はこの春の詠とみられる。(注11)この年三月二十日給題の三昧和歌会が二三日催された。

良経詠は月清集に「院に三昧哥めしけるに高歌」(二五四三・四四) (或) 瘦歌(二五四五・四六) 鶯歌(一五四七・四八) がみえるが、次いで催された当座会暮春一首は不明である。同五月廿六日、鳥羽城南寺御所で影供歌合が催され、晚間郭公(五番左勝) 松風暮涼(二番左持) 遇不会恋(一番左勝) 三首を出詠しているが、月清集にはみえない。(家不見歌78―80参照) 同八月二十日院影供歌合が催され、江月圓雁(二二三) 夜風似雨(二二三四) 依葱増恋(二四五七) を出詠、また「同夜当座御会に山家掃衣」(二二三五) 一首がある。明月記によると同夜良経は有家・定家と呼び作文を催してい



る。

九月十三夜、水無瀬殿で恋十五首歌合が催された。この歌合歌は八

月廿九日給題されたもので、春恋・夏恋・秋恋・冬恋・曉恋・暮恋(定家)

本ナレ<sup>レ</sup> 命高文庫本アリ・駒中恋・山家恋・故郷恋・旅泊恋・関路恋・海辺恋・河辺恋・寄

雨恋・寄風恋(二四三九—四五三)十五首である。歌合勝負は勝

九負六であった。(歌合と教家本勝負付の異同をあげると、一四四

三負一勝、一四五二勝一負、一四五三負一勝)同夜当座御会は月前秋

風、水路夏月、曉月鹿声三首であったが、月清集には「同影供ニナレ」

として月前秋風(一一三六)水路夏月(一一三七)二首がみえる。

次いで折句十三夜、隱題水無瀬河が詠じられたが、良経歌は不明で

ある。この歌合からの撰歌合である若宮撰歌合(勅判)では良経

六・院五・定家三・慈円三・俊成卿女三・有家二・家隆二・宮内卿

二・雅経二首が撰ばれ、良経の歌は最高数を占めており、この撰歌

傾向からも院が良経の歌をいかに高く評価していたか推察に難くな

い。

この年十月二十日内大臣通親が急逝した。通親は土御門帝外戚、

院別当として宮廷権力の中樞を占め、その強引さは院雅事にまで及

び、例えば建仁元年八月十五夜撰歌合の撰歌の場において「内府歌

大略被<sup>レ</sup>入歌、自以<sup>レ</sup>承<sup>レ</sup>之極以泥々」(明月記)という有様で、また

この年五月廿六日城南寺影供歌合においても「依<sup>レ</sup>仰通具朝臣勅<sup>レ</sup>杯

影前具親取<sup>レ</sup>瓶子<sup>ニ</sup>花。召<sup>ニ</sup>予<sup>一</sup>禪師、内府統師、左大臣取如<sup>レ</sup>此文条、内々大令

神仰之曲」(明月記)という状況であって、土御門一門の専横は目に

あまるものがあつた。通親逝去によつて土御門家は漸く影をひそ

め、九条家は宮廷でますます重きを加えるようになってゆく。十一

月二十七日良経は内覧宣旨をうけ、氏長者となり、十二月二十五日

撰政に任じられた。

建仁三年(一一一三)一月十五日、京極殿初度管弦和歌御会が催

された。良経詠は松有春色(一四二二)である。二月二十三日、和

歌所で各二人相替りて勝負を評定する「如松火」一首歌合が催され

ているが、良経歌は不明である。同二十四日、「建仁三年春上皇大

内の花御覧しけるにちりたる花を手箱蓋御手箱のふた(歌)に入て給けるに」(一一〇一

八一—九)と題詞のある院・良経の贈答歌一首がある。この院花見

御覧については家長日記・明月記に詳細である。六月十六日、院影

供歌合に良経出詠、草野秋近(一一〇一)水路夏月(一一〇二)雨

後聞蟬(一一〇三)三首で、歌合勝負は勝二負一(教家本勝負付は

勝三)であった。後当座御会夏月二首が行われ、月清集に「影供の

ついでに夏月を当座」二首(一一〇四、〇五)がある。

同年七月、八幡若宮撰歌合が催された。この撰歌合は類従本に七

月十五日とあり、後鳥羽院御集には七月五日とあるもので、定家は

六月末より有馬の湯にいて、七月十一日帰京しており、この歌合に

は出詠していない。院は七月十日、水無瀬御幸、八月三日還御されているから類従本の七月十五日は撰歌合の成立を意味しない。月清集には「八幡若宮哥合院よりたてまつられし六首内」(加藤四) (一一四四) 野径月(一一四五) 故郷霧(一一四六) ○海辺雁(一一四七) 「院より八幡若宮にて哥合ありし六首内」○囀中恋(歌合囀中慕)(二四八七) 「山家松院より八幡若宮哥被奉六首内」(一五二四) とある。(○は撰歌合歌) や、錯雑した題詞であるが、定家本の一五二四に「被奉」とあることはこの撰歌合の成立事情を示唆しているといえよう。すなわち類従本の七月十五日は石清水八幡若宮に奉納された日を意味し、したがって撰歌合が催されたのはこれ以前で後鳥羽院御集の七月五日とあるのに従ってよいのではあるまいか。(注12) 撰歌合勝負は勝二負一で、教家本は六首すべてに勝負がなされ、勝三負一持一である。

七月二十七日、良経は宜秋門院詩歌合を催した。詩題は風景千秋久、歌題は秋月久澄で良経は詩を詠じている。八月一日良経邸で詩歌合が催された。題は花添山気色・水辺涼自秋・月明風又冷・雪中松樹低・囀中眺望の五題十首で、前述のごとく正治年間に詩歌合が行われてきたが、詩題と歌題は別であって、詩と歌を合わせるところに興味が有り、文芸的な意識は必ずしも高くないわけであるが、この詩歌合では一歩を進め、同題詩歌合としたのである。拾遺愚草

に「撰政殿にて哥を詩にあはせらるへしとておなし題を二首よませられし、詩歌合とかやの初也。此後運々有此事」と注することく、詩歌合の最初といってよく、一条兼良の文安詩歌合一番判詞の詩歌合といふものは上古にもありけんをしるし伝へさりけるにや。中比建仁の撰政此道を下に広め侍りし後、元久の上皇そのしるしを上へのべましましけり。

とあるのは具体的にこの詩歌合をさしていると思われる。

この月六日、俊成九十賀屏風歌詠進の儀がおこり、十四日良経は歌を定家にみせて院に進め、翌十五日京極殿で屏風歌撰定が行われた。(一三七九—一三九〇) 屏風歌に撰定された良経詠は春帖・霞(一三七九) である。撰定後「あさのつき」五字題五首歌が催され、月清集には「院にて八月十五夜当座御会に」詠秋月 和哥五首(一一三九—一一四三) がある。俊成九十賀宴は武士・堂衆騒擾のため延期され、十一月二十三日和歌所で行われた。この時の良経歌一首は家集になく、続後撰集によってしられる。(家集不見歌81 参照)

元久元年(一一〇四)、この年良経はしばしば詩会を催している。六月十二日、三史詩序を結構、明月記には「時々有る如し此、普通事、可石諸儒等之由、儒卿等中行云々」とあり、この種の詩

行事が多かったようである。六月二十二日には秋近管弦中の題で詩会を催している。七月十一日、院宇治御幸があり、十六日宇治御所で五首歌が講せられた。月清集に「宇治御所にて院の御会に」のナレ歌にナレ歌山風（二一四八）水月（二二四九）野露（二四五〇）夜恋（二四六三）秋旅（二四八六）がある。教家本には勝四持一の勝負付がなされている。ついで八月十五夜、五辻殿初度と歌御会が催され、良経詠は松間月・野辺月・田家月・彌旅月・名所月（一一五一―一五五）五首がある、（教家本には勝三負一の勝負付がある）。同日当座会が行われ、瓶月（二一五六）一首が詠まれている。この年十一月十日、春日社歌合が催された。落葉（二二三九）暁月（二五九五）松風（二五二五）三首で、「このつかひはをなし程のよみくちと、世のてつかひおもへるをとりあはせられたり。」（家長日記）とあることく好敵手と思われる歌人を組み合わせた歌合であるが、良経は院と結番され、結果負二持一の成績であった。この後当座三首御会があり、定家本月清集には「院にて当座旅心を」（一四八九）一首のみがみえる。この歌は北野宮歌合「彌旅」の歌であるが、教家本には「北野宮哥合時雨」（二三四〇）「北野宮哥合忍恋」（二四六四）「院にて当座御会旅」（二四八九）三首があり、当座御会が後結番され北野歌合として奉納されたと思われる。（注13）

元久二年（二二〇五）二月二十一日、親経は新古今集序を奏覧、撰集事業も部類を一応終り、二月二十二日以後切稚の段階に入る。三月二十六日、新古今竟宴が催されたが、良経の仮名序もまだなく、所突の感があり、定家はしきりに不満を洩らしている。この竟宴の良経詠一首は家集になく、新古今和歌集竟宴倭歌（群書類従）および続古今集巻二十賀にみえる。（家集不見歌82参照）四月二十九日、良経邸で詩歌合の企てがなされ、題水郷春望、山路秋行二題各二首、（各題二首詠は前年八月一日良経家詩歌合を踏襲している。）歌人、慈円・良平・有家・定家・保季・家隆・雅経・具親・讃岐・丹後・詩人、良経・良輔・資実・親経・長兼・為長・宗業・成信・孝範・信定各十人と定められたが、五月三日、院の聞くところとなり、参加の希望あり、家長も所望してこの結果詩人歌人各十九名の大詩歌合となった。五月十二日、良経の手許で大略結番がなされたが、「殿下詩歌合於院御所可被合之処、詩於御所未被詠、仍被忌五月延引云々」（明月記五月十日条）の理由で、六月十五日五辻殿御所で詩歌合が催された。良経の詩は水郷春望一番左（巻）（石家隆）

土俗地低春草底 海仙樓遠曙雲間

同二番 左（巻）

沙村遙風烟霞境 水沢半春花柳山

で山路秋行卅七番左・卅八番左の詩は現行本では欠けており、勝負も付されていない。

後鳥羽院御集によると七月十八日北野社歌合（祈雨当日出題撰歌判有序）が催されているが、良経詠は不明である。この年十一月三日、良経邸で詩歌遊がなされている。（明月記目錄）

建水元年（一二〇六）一月十六日、高陽院初度御会が催された。

歌題は庭花存久一首で、定家本月清集には「高陽院初度御会に」の題詞のみが記されていて歌は不明である。（注14）家長日記によると良経は三月三日、中御門新邸で曲水の宴を催すべく企てていたが、熊野本宮焼失により延期するうち、三月七日夜急逝した。（注15）時に三八歳である。

良経はその初学期、兄良通に従って聆句や詩を習作するとともに、和歌に興味をもち、建久期、和漢兼作の立場をとりつゝも、慈円、定家・寂蓮などとの交りによって新風和歌を志向し、良経歌壇を形成した。正治・建仁期、一方で新古今歌壇において院に次ぐ重要な位置を占め、歌人として大成するとともに詩を愛好し、さらに一步を進めて詩歌を一つとする文芸的詩歌合の世界を築いた。本稿は良経詠歌年次の推定・整理を主とし、良経における歌風の展開、和漢兼作の意義等について触れるところがなかった。後日を期した

い。

注1 定家のその後の詩作については、石田吉貞博士「定家と漢詩」（水雲昭15・8、「新古今世界と中世文学」昭47刊所収）がある。

注2 孝範は正治年間の良経家詩歌合には名前が表われないが、元久元年六月二十二日の良経作文会にその名がみえる。

注3 原田芳起氏「後京極撰政と三十六番相撲立詩歌」（樟蔭国文学第1号）

注4 教家本月清集には十首歌すべてに勝負付がなされ、これによると良経の歌はすべて撰歌となったことになるが、（定家は五首）教家本勝負付はやゝ疑点もあり、後考に俟ちたい。

注5 「正治・建仁期の歌壇と新古今集」（「新古今和歌集の研究」昭43刊所収）

注6 「仙洞十人歌合は衆議判か」（国語国文昭28・2）

注7 久保田淳氏は万代和歌集・恋一の「早瀬河」の詠を建仁二年二月十日和歌所影撰歌合の作かとされているが、（前掲藤原家降詠歌年次考）この影撰歌合の詠である。

注8 有吉保氏「千五百番歌合の校本とその研究」（昭43刊）

注9 「校訂新古今和歌集」（武威野書院 昭39刊）は九四一の一

みについて「建仁元年八月十五夜当座歌合」と正している。たゞし当座歌合は当座御会のおやまりである。

注10 刈谷図書館村上忠順書入本月清集頭注に「宜秋門院者建保元年十月七日為尼給、後京極喪後事也、若別女院歎不審也。」とあるが、誤りである。

注11 良経は中御門京極に新所を造営し、元久二年十月十一日に移っているが、この歌は月清集教家本成立の元久元年十一月十一日以前の詠であるので、九条邸新所での詠とみられる。

注12 石田吉貞博士は七月八日とされている。（「藤原定家の研究」昭32刊・六七七頁）

注13 拙稿「秋篠月清集考」（甲南女子大研究紀要第6号）

注14 拙稿「高陽院初度御会のこと―定座本月清集書入れをめぐって―」（甲南国文、第19号）

注15 良経の死については石田吉貞・佐津川修二氏著「源家長日記全註解」（昭43刊）解説に詳細である。

〔附〕 家集不見歌

上述してきた良経詠で家集「秋篠月清集」に見の歌を年次別に一括して掲げておく。

文治五年

殿の大納言俊成殿後十首歌本歌并叙連和可御覧之由被示。仍持参之命進了。其後又和道其詞云。遺懷四明幽趣奉和十首之佳什 志賀都遺民

1 しられぬは見ぬ山路まで思やろとや秋の空につきけむ  
（拾玉集・五九九一）

2 うき世かないかにならましますゝむしもたのむ山路に声たてつなり  
（ 〃 〃 五九九二）

3 おはたけのたかねにみゆる秋の月やとの物とや君はなかむる  
（ 〃 〃 五九九三）

4 われもしろとろは行てみるやとにまかきの野へを分ぬ計そ  
（ 〃 〃 五九九四）

5 さをしかのよふかきろをひとりとやまの袖にしるらむ  
（ 〃 〃 五九九五）

6 しかの里のいなはに風はつたひきてなからの山をこゆる鹿の音  
（ 〃 〃 五九九七）

7 木のはわけかへりし山のはつ時雨ききわく袖に色は見ゆらん  
（ 〃 〃 五九九八）

8 法の水こゝろにふかくせきいれてむかしにかへすひらの山かせ  
（ 〃 〃 五九九九）（注1）

建久元年

文治六年女御の入内はて、左大将候はれしかは、雪のふりたるあ

した御修法結願していつとてかたりし歌、正月十四日になん

(9)みかさ山君かこゝろの雪見れはさしてうれしき千世のはつ春

(拾玉集・五四七〇)

御吹かへすむかしのかせにいつしかとかけなひくへき君とこそみれ

( ) ・ 五四七一

返し 左大将

9みかさ山雪ふりに本わける跡なれはこゝろの春のすゑもたのもし

( ) ・ 五四七二

10いへのかせつたふるやとのあたりをはかけなひくへき道とこそお

もへ ( ) ・ 五四七三

文治六年三月五日、実命免せられぬとき、左大将の御許より

11このうちをつるに出ぬるあしたつはこれさまことの命なりける

(拾玉集・五四八六)

御返事に

(11)千代ふへき君なれはこそつるのこのこれさまことの命ともしれ

( ) ・ 五四八七

此の歌の事を定家朝臣申たりけるとて、また左大将よみてつかは  
したる 喜撰余流

12あたたらよをわれもたゝには山しるの世をうち山のいにしへの跡

(拾玉集・五五二九)

13鳥のねのあはれをかくる袖のうへに月も色あるうちの明ほの

( ) ・ 五五三〇

14うつひともたくふ嵐もうときに世にきぬたの音をなれし物とて

( ) ・ 五五三一

15もみちふく峯のあらしのくらき世におもかけにたる袖の色かな

( ) ・ 五五三四 (玄玉集)

16このてらのむかしの跡を思ふにもこゝろすみぬるうちの山陰

( ) ・ 五五三六

17ならの都かすかの里に我ゆかはしるよしすへき人のなきこそ

( ) ・ 五五三七

18おはかたはこゝろなき身とおもへとも此里にてはとふへき君を

( ) ・ 五五三八

其後、雪ふりたりけるつとめて、たれともなくて左大将十首の歌  
をよみて定家朝臣のもとにさしをかせられたりければ、誰ならん  
とあやしみて、あはれきこそとてゆふへになりてかへししてまら

いせたりけりとなん

大將殿之十首

19 ことしさへ花より雪に成にけりなにもなくて山里にのみ

(拾玉集・五五三九)

20 見せはやなこほれる露に影とめて庭の木のはにやとる月影

( ) ・ 五五四〇 (玄玉集)

21 柴のいほの嵐にたへぬあれまよりさえる月にとこをまかせて

( ) ・ 五五四一 (玄玉集)

22 跡もなき庭はかれのゝけしきにて心のみちもしもうつむなり

( ) ・ 五五四二 (玄玉集)

23 冬枯にみねの木すゑをなしはてゝたゝ秋なから有明の月

( ) ・ 五五四三

24 風さむみ庭のやり水こほりて松にのこれるいは波のこゑ

( ) ・ 五五四四 (玄玉集)

25 さひしとよたゝわか友とたのみしこし竹のはわけの冬の山嵐

( ) ・ 五五四五 (玄玉集)

26 はつ雪と君は見るらん山里になかめなれたるたゝ今の空

( ) ・ 五五四七

27 法を思ふこゝろのすゑを分とめて君にのこせる身の行ふより

( ) ・ 五五四八

いかにあやしくおほしめすらむ、おほはらよりあさか申候なり上殿

建久二年

雪ふれりけるあか月つきいとくまなかりしによめる歌を左將軍へ  
たてまつる

御月は秋あきは月とそ思ひしを雪ふかゝらぬ冬のあり明

(拾玉集・五五九八)

御返し

28 雪ならぬやみにも秋はしられけりまことにひるのたゝ今の月

( ) ・ 五五九九

左幕府一条へけふまいらむなと申朝に雪ふれりしたりし。かはいひつかはされた

りき。

29 おほかたも君をまちつるけふそかし時しもあれや庭のしら雪

(拾玉集・五六〇〇)

御返事

御けふはいなうき身の跡をつけしとそいともかしてき庭のしら雪

( ) ・ 五六〇一

同朝(閏十二月廿八日)に詠十首左將軍御許へ奉る。此間法皇御  
顔大事にきこゆるころなり。

御あとはおしとはてはいかゝ庭の雪よあやふまれたる昨日けふかな

(拾玉集・五六二)

かへし 暮下

30 われは猶雪の跡をそ思つるなさけあるへきけふとみなから

( 〃 〃 五六二)

御雪にこそかつく見つれ君かやとのみかさの山の花のさかりを

( 〃 〃 五六一三)

31 雪にたに花のさかりのみかさ山まことの春はいかはかりかは

( 〃 〃 五六一三)

御ふりとちぬさらてもまこそ柴の戸は過行跡をよそにいとひて

( 〃 〃 五六一四)

32 柴の戸の雪のかよひちいかにまたふらてもよそにいとひけんあと

( 〃 〃 五六二四)

御宮古へはみなこしちにそ成にける人の跡なき雪の曙

( 〃 〃 五六一五)

33 このはなは嵐のをとをうつめともみねの朝日にちらむとやす

( 〃 〃 五六二五)

御今朝見ればよもの山へは花さかりあさ日のかせの本にちらすへきまで

( 〃 〃 五六一六)

34 ひとせは冬のおくにも成にけり都にふかき雪のしら山

( 〃 〃 五六二六)

御みせはやななみ本淡路のしまのけさの雪をさらからうつす池のあたりを

( 〃 〃 五六一七)

35 ほかにまたなにとふらん油水のあさけにかすむ雪み本行旅のなかしま

( 〃 〃 五六二七)

御やとことにふりつむ雪のなかめ哉ふかき心を庭にまかせて

( 〃 〃 五六一八)

36 たはるのとなりならてはやとことに思のこさぬ雪の明ほの

( 〃 〃 五六二八)

御人のやとのなかめはいかに今朝の雪よあはれうき身は心さへなき

( 〃 〃 五六一九)

37 人はいさわかすむやとの雪のうちには心にとは思しりなん

( 〃 〃 五六二九)

御かきくもりふりくる雪に此ころのよのなけきまで空にみる哉

( 〃 〃 五六二〇)

38 けさはまた雪けの空も霧はれてたのみあるへき世のなけき哉

( 〃 〃 五六三〇)

御はなよ月かすめすこしのつるに猶雪の朝も達磨なりけり

( 〃 〃 五六二一)

39 いな達磨人たに(假本)もなし雪の歌ふかき心は密宗といはん



建久三年

建久三年正月、無動寺より同大將軍御もとへ申。青陽之初上春之  
候自深山幽谷報花洛尊閣詞云

御見せはやな神も仏も君にのみめくみあるへき春のけしきを

(拾玉集・五六四二)

御みせはやな都のやとのはしめにはにぬ物からの春のけしきを

(・五六四二)

御見せはやな鶯いつる谷の戸にわか門しむる春のけしきを

(・五六四三)

御みせはやなはるかにこそはなかむらめの山の霞のはるのけしきを

(・五六四四)

御みせはやなあつまの里のはるかまてなかわるみねの春の気色を

(・五六四五)

御見せはやなたにの氷はわたなからわかすむ山の春のけしきを

(・五六四六)

御みせはやな雪の木す系の昨日けふ春をもはする春の気色を

(・五六四七)

御見せはやなつもりし雪はきえはて、小鳥木つたふ春のけしきを

(・五六四八)

御みせはやなみねの朝日のうら／＼と君うちたのむ春のけしきを

(・五六五〇)

忽披一帯之佳什如対四明之勝趣、不堪情感惹以答和而已、  
草。 歌苑凡

40 わかおもふ神も仏もめくみあらは心そいと、春の気色に

(・五六五一)

41 わか思ふ君かすみかのおも影は松たつかとの春のけしきに

(・五六五二)

42 わかおもふ鶯いかはつねなく谷のとほその春のけしきに

(・五六五三)

43 我おもふ山のたかねにたとる哉いつくもかすむ春のけしきに

(・五六五四)

44 わか思ふころをそへてなかわへしあつまにつく春のけしきを

(・五六五五)

45 わかおもふ契を水にむすはせて都ははやく春のけしきに

(・五六五六)

46 我おもふさくらはまたし雪きえぬ山をそ思ふ春のけしきに

(・五六五七)

47 わかおもふころも雪もとけぬれば鳥もさこそは春のけしきに

(・五六五八)

48 わか思ふ日よしのかけもうらくと君ゆへてらせ春のけしきに

( 〃 〃 五六六〇 )

建久四年

建久四年九月十三夜に左將軍森下にたてまつる

御君にとはむなな月のよの月やこれくもらぬ空に秋をささめ

( 拾玉葉・五六七四 )

50 人しらし君はかりこそ思らめよひの月を今夜なりとは

( 〃 〃 五六七六 )

51 月をのみ思出にするうき身哉ことしもこそもはすての山

( 〃 〃 五六七七 )

御返事

49 とふ人につけて心の色をみんな思こめたる秋のよの月

( 〃 〃 五六七九 )

50 若そしることよひの月は今夜までたれかはとのみなかめつる身を

( 〃 〃 五六八一 )

51 としもへぬわれ思しれ秋の月猶行すゑもはすての山

( 〃 〃 五六八二 )

建久四年十月八日朝、初雪のことのほかにかふりたりしに、日吉行

幸ちかゝるへきにてありしに

左大將殿より

52 冬きてはいく夜もあらぬ呉竹の箱かと思れははつ雪の空

( 拾玉葉・五七〇六 )

53 むら雲をやかてあらしの吹ためて時雨をうつむ初雪のそら

( 〃 〃 五七〇七 )

54 月みつる夜半のこゝろはきえにけり雲とやつらきははつ雪の空

( 〃 〃 五七〇八 )

55 思あへす冬のおくこそしられぬれまつ雲ふかしはつ雪の空

( 〃 〃 五七〇九 )

56 いとふへき日影は軒にわすられて雨つらめしきはつゆきのそら

( 〃 〃 五七一〇 )

57 ひえの山いつより風のことほりけむ都はけさそはつ雪の空

( 〃 〃 五七一一 )

58 なかむへきその日もちかししかの山しはしはおもへはつ雪のそら

( 〃 〃 五七一二 )

59 こゝなから山路思ふそあはれなる君かわくへきはつ雪の空

( 〃 〃 五七一三 )

60 かねてより日吉のかけもそひぬらむみゆきにつつけ初雪の空

( 〃 〃 五七一四 )

61 おほかたはいつかは君をおもはさる雲あけそむるはつゆきの空

( 〃 〃 五七一五 )

御返事に

60 呉竹の夜もあけかたになかむれば霜よりあつきはつ雪の庭

( 〃 〃 五七一六 )

61 木すゑふくこのはも風もとたえて時雨にかふる初雪のには

( 〃 〃 五七一七 )

62 神無月いくかもあらぬゆふつくよひかりにつくはつ雪の庭

( 〃 〃 五七一八 )

63 雨かくは中々にたふらてあれな朝日をまたぬはつゆきのには

( 〃 〃 五七一九 )

64 大たけも日ころはしるく見えさりき都も今そはつ雪の庭

( 〃 〃 五七二〇 )

65 しかの山のおもとをめぐるしらかさねかつ見するはつゆきの  
には

( 〃 〃 五七二二 )

66 みやまぢをわくるころはあさけれとよそにはふかきはつ雪のに  
は

( 〃 〃 五七二三 )

67 思やる山のおくこそしらぬれいつしかふかき初雪のには

( 〃 〃 五七二三 )

68 神もいかにかねてうれしとおもふらんみゆきつむへきはつ雪の庭

( 〃 〃 五七二四 )

69 おもへともかくともわれはいはしるのまつもかひ有はつ雪のには

( 〃 〃 五七二五 )

おなしきとし左大将のむはのあまうへうせられたりしころ、雪の  
ふたりたりし朝にかたりし東山光明院に長家はありき。北政所は  
九条殿よりかよひておはしますときき。

70 今朝はいと、庭の雪にもことよせてふかきはれを思とくらむ

(拾玉集・五七四八)

71 おもふらむこころのすゑもあはれなり雪にそふかき山里の色

( 〃 〃 五七四九 )

返し

72 思とくころの末もみちたえて猶ゆめふかし雪のあけほの

( 〃 〃 五七五〇 )

73 せきかぬるころは君かやとにみよ朝日の軒の雪のころもて

( 〃 〃 五七五一 )

は、のおもひにてこもりゐたりし冬雪のあしたに大将殿より

74 みよしやをはすて山のはる秋もひとつにかすむゆきのあけほの

(拾遺愚草・二二三六八)

75 しもかれのまかきの、へのけさの雪とをき思をにはに見る哉

( 〃 〃 二二三六九 )

66このさとはまつへき人のあともし庭のしらゆきみちはらふとも

( " (三三七〇) )

67おもへともきみをたつねゆきのよに猶はつかしき山かけのあと

( " (三三七二) )

68ななめするわかそてならぬくさも木もしほればはてぬるけさの雪哉

( " (三三七二) )

御返し

69おもかけのそれかと見えし春秋もきえてわするゝ雪のあけほの

( " (三三六八) )

70昔今心にこそすそらもなしかれのゝゆきのはのひとむら

( " (三三六九) )

71わかやとの雪はいくへとはるや見むあれにしのちのよもきふのか

け ( " (三三七〇) )

72おもふてふたゝさはかりをわか身にてゆきにへたゝる山かけも哉

( " (三三七二) )

73袖のうへはよもの木くさにしほれあひてひとり友なき雪のした哉

( " (三三七二) )

建久七年

方今遙思四明之風景 忽述十首之露詞、不願客嘲竊寄禪居而已。

門下槐樹

69 風につけ月にまかせてあくかるこゝろのはては君かあたりに

(拾玉集・五八五六)

70 また見ねはしらすなからの山なれと梢の秋にかよおもかけ

( " (五八五九) )

71 さとりかなむなしき色を君みよと木のはふりしくひらの山風

( " (五八六〇) )

72 世の中のおほつかなさにまよひぬと君にをつけよ山のはの月

( " (五八六一) )

73 みかくなる玉のひかりのかひあらは君かみ山のみちはくもらし

( " (五八六三) (注2) )

御返し

74 月にふく峯のまつ風さそひきてわかなかめをは君につくらむ

( " (五八六六) )

75 きく袖にしかのささ浪かけつらしなからの山の秋の木すゑは

( " (五八六九) )

76 君かとふことのは風のなかりせはむなしき色のちるをみましく

( " (五八七一) )

77 もろともに秋の月にを契をかむ世にふるみちの末の有明

( " (五八七二) )

78 (一首欠)

建久七年十二月二十六日つとめて内大臣殿へ

74 ふかきかみにまよふころそなかりけるたのむ日吉のかけをまつ  
とて

(拾玉集・五八七八)

75 としくれてかみよりかみにうつるかないつかいつへきわか春の日

(拾玉集・五八七九)

御返事

76 世のひとのさなからくらきなかにゐてわか春の日をさりともの

(拾玉集・五八八〇)

77 わかたのむ日よしの影は君ゆへにいとよみなくならむとやす

(拾玉集・五八八一)

同年雪の朝に内大臣殿より

78 けふこんとたのみし君をまつ程にあとおしますと雪やうらみん

(拾玉集・五八八二)

御返事

79 跡おしむ雪のうらみを思ふとてけふこぬ人となりにける哉

(拾玉集・五八八三)

建仁元年

四月卅日鳥羽殿影供歌合

曉山郭公

77 足引の山かひあれよほととぎす名残ありあけの月かたのこゑ

(古典文庫刊中世歌合集上・鳥羽殿影供歌合・二番左勝)

建仁二年

五月廿六日影供歌合

曉山郭公

78 月のゆくせきの旅人出ぬらし山に友なふほととぎすかな

(群書類従・卷百九十二・影供歌合・五番左勝)

松風暮涼

79 たゝならぬ夕まくれ哉思ふにも松ふく風の音は身にしむ

(群書類従・卷百九十二・影供歌合・五番左勝)

遇不会恋

80 これまでもさそな昔のならひ哉待夜いまはのかたしきの袖

(群書類従・卷百九十二・影供歌合・五番左勝)

建仁三年

和歌所にて皇太后宮大夫俊成に九十の賀給ける時

(十一月廿三日)

81 百年に十年およはぬ昔の袖けふのころや包みかねぬる(風雅集

・卷二十・二一八四)

元久二年

新古今和歌集寛宴倭歌(三月廿六日)

82 しきしまやまとはのうみにしてひろひしたまはみかゝれに

けり(群書類從卷第七十八・新古今和歌集竟寢倭歌・統古今集  
・卷二十賀・一九〇七)

年次不明

題しらす

83 いかはかり和歌の浦風みにしみて宮はしめけむ玉津島姫(統古今

集・卷七神祇歌・七二九)

恋のうたとて

84 みくさるる板井の清水としふりて心の底をくむ人そなき(統古今

集・卷十三恋三・一一一三)

題しらす

85 立掃り道ある世にはなりぬれともおもふ思の末やまよはむ(統拾

遺集・卷十七雜中・一一七五)

題しらす

86 千早振るわけいかつちの神しあれは治まりにける天の下哉(統拾

遺集・卷二十神祇・一四二七)

題しらす

87 ふみわくる跡ふりうつむ庭の雪は人よりさきにとふかひそなき

画一本  
(万代和歌集・卷第六・冬歌) (注3)

注1 拾玉集には十首歌中九首を載せ、「一首不足歟」と注記がある、内容からみて第九首目の歌を欠いている。

注2 73の歌は書陵部桂宮本・神宮文庫本・島原・松平文庫本・北大図書館本月清集には、「前大僧正慈鎮、天台座主に成て勅学講といふことをしておこなひ侍けるをきゝてつかはしける」の題詞で巻軸に書き入れてある。

注3 万代和歌集・卷第二・春歌下に「百首歌中に後京極撰政太政大臣」とある「立かへる春の別のけふことに恨てのみもとしをふるかな」は、定家の一字百首中の歌である。